

STD(性行為感染症)に関する調査

十文字学園女子大学

社会情報学部・社会情報学科

星野ゼミ卒業研究

寺島 久美香

宮崎 さおり

渡辺 千絵

目次☆

はじめに	2
第Ⅰ章 研究方法	
1 調査概要	6
2 分析方法	7
第Ⅱ章 結果と考察	
1 STD・性行為に関する知識	8
2 STD・性行為に関する意識	18
3 避妊用具の意識と知識	28
4 若者の現状	33
第Ⅲ章 まとめと今後の課題	
1 まとめ	44
2 今後の課題	45
参考資料	46
付表	47
1 調査票	
2 発表資料	

はじめに

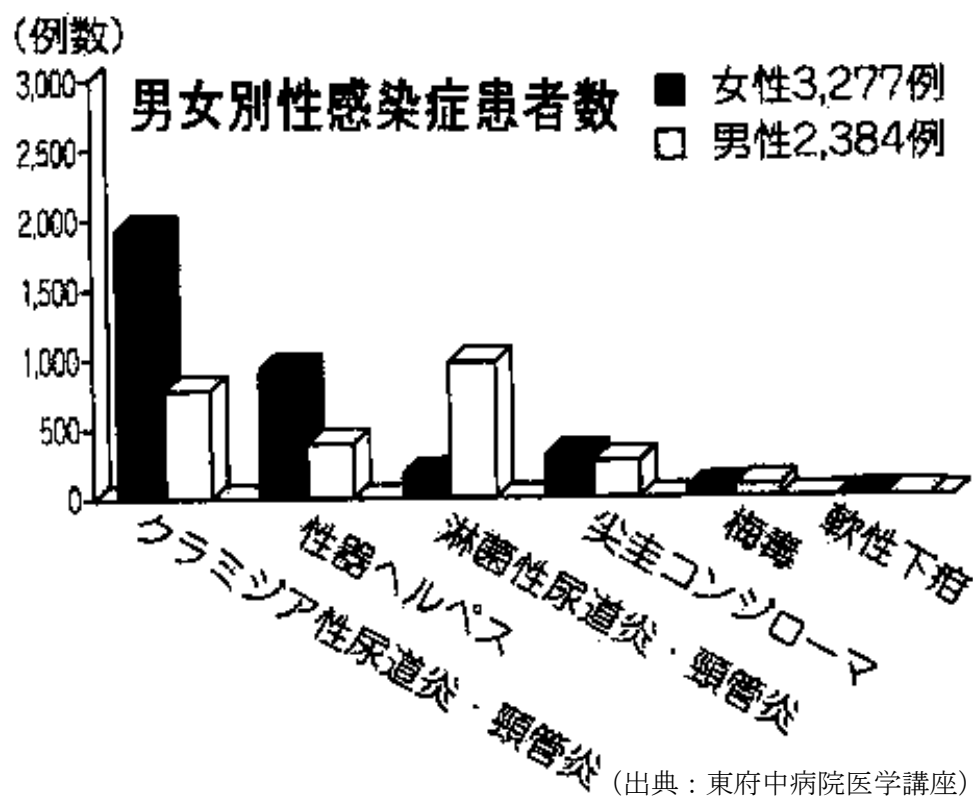
性行為感染症(STD : sexually transmitted diseases)とは、主に性器に関する感染症を表す。又、性行為あるいはその類似行為によって感染する病気を示している。性感染症の歴史は古く、性病(veneral diseases)と呼ばれ、「梅毒」「淋菌感染症」「尖圭コンジローム」などが代表的な病気である。今日、性感染症に対する社会的関心は高まり、その社会的な取り組みも変化している。「AIDS」のように致命的で、明確な治療方法が確立されていない病気が出現し、世界的に増加している。

現在、ピルが解禁になり、妊娠は避けることが可能になってきている。しかし、「STDに感染する」ことの方が、より注意しなければならない問題点となってきている。従来「性病」といわれていた性感染症は、歓楽街、風俗などで男性達が感染した、自業自得の不潔な感染症といわれていた。その男性から病気をうつされる女性は、同情されていた。その為、歓楽街の女性達とその男性達を教育し、病気を広げないようにしすることが、当時の人達の考え方であった。

現在、世の中が大きく変わり、性病は今までのような「特別な人々がかかる感染症」ではなくなっている。普通の性生活をもつ人々が、感染する病気にまでなっている。その現状に対応するため、1999年(平成11年)4月から施行された「感染症予防新法」において、「性病」は「性感染症」と呼び名を変え、他の感染症(インフルエンザや結核、エイズなど)と同じような感染症として扱われるようになった。性感染症は特別な人達のみがかかる、別扱いするような病気ではなく、今や性生活をもつ人なら、誰もが感染しても決して不思議ではない感染症となっているのである。性感染症問題が自分の身近に迫ってきていることを理解していきたい。

本研究においては、以下の3点を明らかにすることを目的とした。

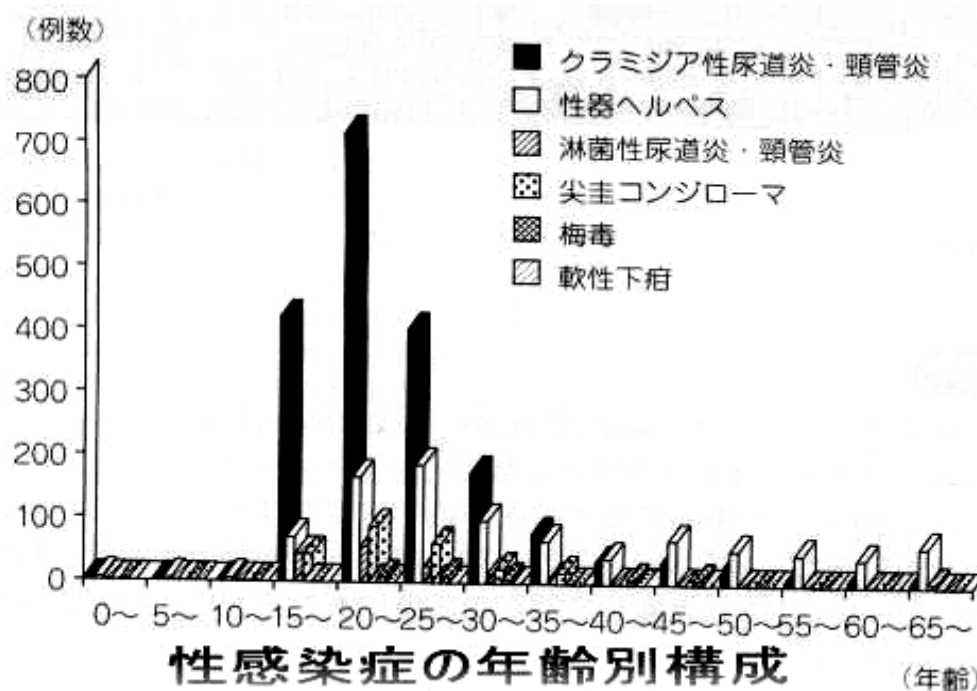
- (1) 男女によるSTDへの関心の違いを明らかにする。
- (2) 避妊用具の知識と使用目的を明らかにする。
- (3) 性経験の有無に関する知識と意識を明らかにする。



図表1 男女別性感染症患者数

上の図表1はモデル県におけるSTD Sentinel Surveillance研究班（平成10年6月）の報告による男女別性感染症患者数をあらわしている。患者数の最も多い性感染症はクラミジア性尿道炎・頸管炎であり、次いで性器ヘルペス、淋菌感染症と続いている。

しかし、ここで注目すべきことはクラミジア感染症、性器ヘルペスは男性より明らかに女性の方が患者数が多い事である。すなわち、「性病（性感染症）は男性の病気である。」という従来一部にみられた社会的な考えは明らかに問題があり、男性のみならず女性も気をつけなければならない疾患であることを示しているのである。疾患の性質状、予防や治療など全ての面において恋人同士で対応すべきなのは当然である。

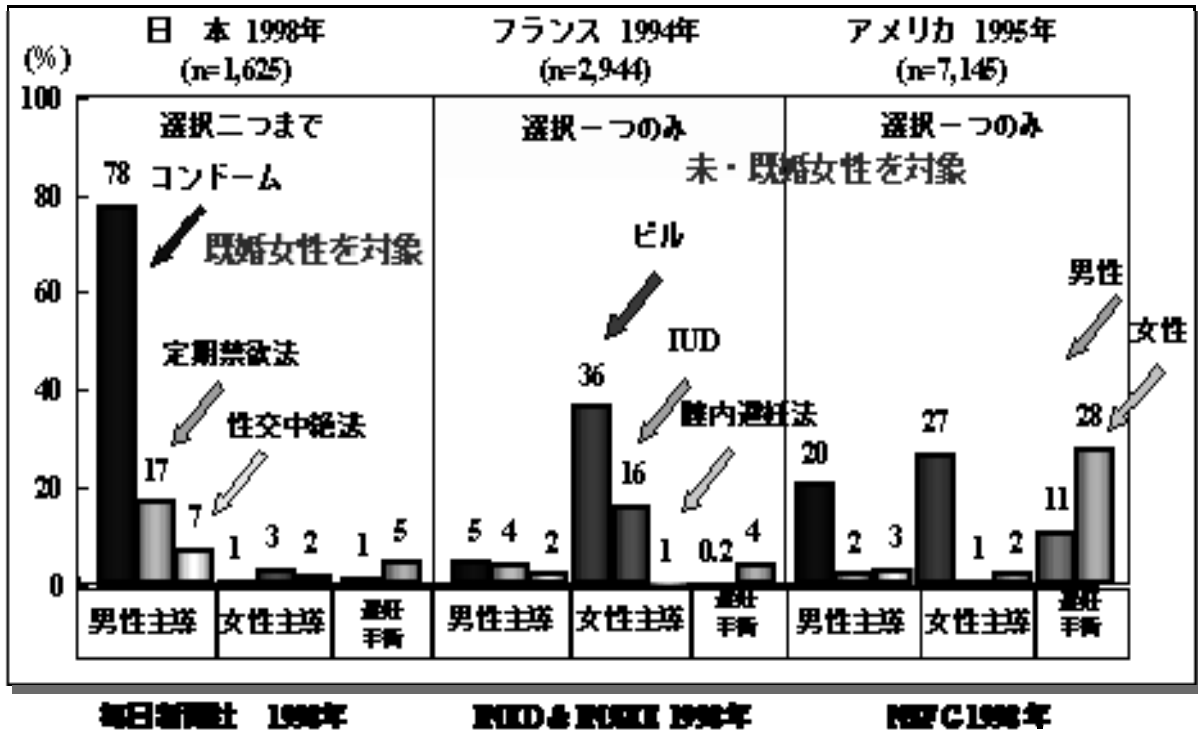


(文典：東府中病院医学講座)

図表 2 性感染症の年齢別構成

上の図表 2 はモデル県における STD Sentinel Surveillance 研究班（平成 10 年 6 月）の報告による男女別性感染症患者数をあらわしている。性活動が最も活発な 20 代、30 代に罹患者数が集中するのは性感染症という疾患の性質からして当然と思われる。この年齢層ではクラミジア感染症が最も頻度の高い性感染症である。次いで性器ヘルペス、淋菌感染症、さらに尖圭コンジローマ、梅毒と続いている。

さらに注目する点は十代の患者数の急激な増加である。クラミジア感染症のみならずその他のすべての性感染症の患者数も増加傾向にあることより、「性感染症の低年齢化が進んでいる」と結論づけることができる。



図表3 海外との比較

上の図表3は日本、フランス、アメリカの3カ国の避妊事情の比較である。

日本は、現在行っている避妊法を2つまで選択する調査法だが、コンドーム、オギノ式や基礎体温法を含めた定期禁欲法、性交中絶法となっており、いずれも男性の協力に依存するもので、男性主導の避妊法の形態を取っているといえる。

フランスは、主な避妊法1つのみの選択であるが、ピル、IUDと続き、コンドームは、わずか5%にしか過ぎない。したがって、女性主導の避妊法の形態といえる。

アメリカも、フランス同様、主な避妊法1つのみの選択であるが、女性の避妊手術が多く、ピル、コンドームと続いている。女性が主体ではあるが、男女相互の避妊法の形態ともいえる。

第 I 章 研究方法

1 調査概要

平成 15 年 12 月に十文字学園女子大学と同年代（18～26 歳）の男女を対象として、STD（性行為感染症）に関するアンケート調査を実施した。「1 STD・性行為に関する知識」「2 STD・性行為に関する意識」「3 避妊用具の意識と知識」「4 若者の現状」の 4 つである。

有効サンプル数は 251 である。しかし、各分析においては、必要な項目に無回答であるデータを含まないため、サンプル数に変化が生じている。

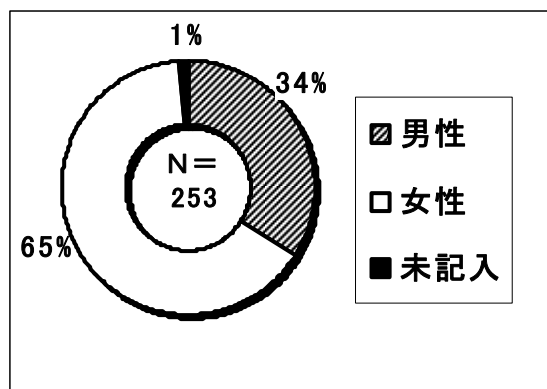
調査対象の属性としては、図表 I－1～I－4 に示したとおりである。

図表 I－1 は性別のグラフである。その内訳は、「男性」が 34% の 86 人、「女性」が 65% の 162 人、未記入は 1% の 3 人である。

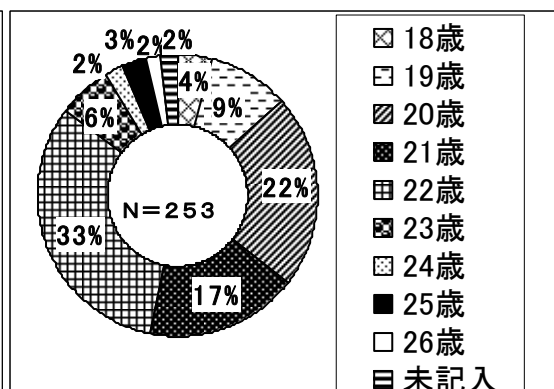
図表 I－2 は年齢のグラフである。その内訳は、「18 歳」は 4% の 9 人、「19 歳」は 9% の 24 人、「20 歳」は 22% の 56 人、「21 歳」は 17% の 44 人、「22 歳」は 33% の 82 人、「23 歳」は 6% の 15 人、「24 歳」は 2% の 6 人、「25 歳」は 3% の 7 人、「26 歳」は 2% の 3 人、「未記入」は 2% の 5 人である。

図表 I－3 は住まい形態のグラフである。その内訳は、「実家」に住んでいる人は 67% の 169 人、「一人暮らし」は 25% の 64 人、「その他」は 5% の 12 人、「未記入」は 2% の 6 人である。その他の中には、結婚、同棲、親と上京などがある。

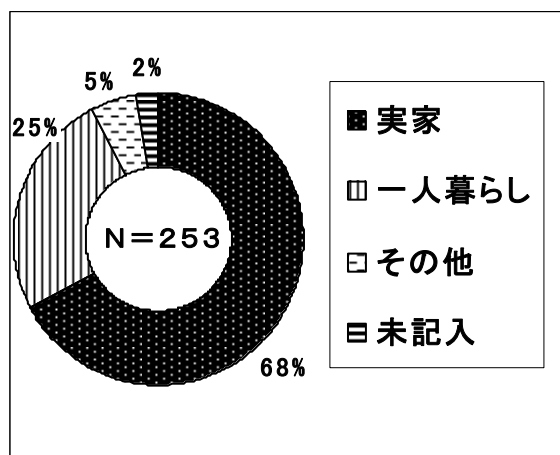
図表 I－4 はパートナーの有無についてのグラフである。その内訳としては、「特定のパートナーがいる」は 48% の 122 人、「複数のパートナーがいる」は 2% の 4 人、「今のところパートナーがいない」は 42% の 106 人、「その他」は 2% の 5 人、未記入は 6% の 14 人である。その他の中には、「微妙」「性行為のパートナーとしてではなく、恋人となら行為をすることもある」といったのもあった。



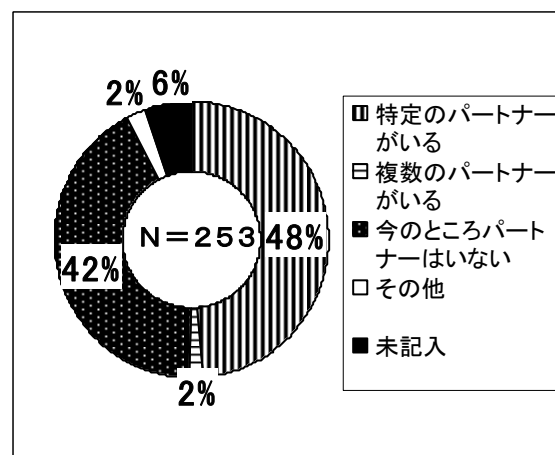
図表 I－1



図表 I－2



図表 I - 3



図表 I - 4

2 分析方法

「1 STD・性行為に関する知識」では、主に該当する項目の選択により回答してもらい、各項目で得られた回答の割合を求め、SPSS の記述統計や、T 検定を元に Excel を使用して、グラフ化した。図表 I - 2 では、4 段階評価を用いた。回答形式は、「全く知らない」「ほとんど知らない」「少し知っている」「だいたい知っている」の 4 段階とした。又、1 の中でもっとも気になる部分の項目について他の質問との関わりなど、主にクロス表などを使い分析した。

「2 STD・性行為の関する意識」においても、主に該当する項目の選択により回答してもらった。図表 II - 18 に関しては、1 位～3 位まで順位を記入してもらった。得られた回答に、SPSS により記述統計を行った。図表 II - 21 も図表 I - 2 と同様に 4 段階評価を用いた。SPSS の因子分析を行い、4 因子を抽出した。因子抽出については、主因子法を使用し、抽出後にバリマックス回転を行った。また、因子ごとに男女比や、意識、知識をグラフに表した。

「3 避妊用具」においては、平均値を求めグラフにあらわした。図表 II - 30 において「男性用コンドームを使用したことがあるか」の質問で「はい」と回答した人に対し、図表 II - 3 でその目的を選択肢の中から回答してもらった。

「4 若者の現状」においては、初体験など男女比に表した。又、経験の有無についての意識や知識を男女比で調べ、グラフに表した。又、図表 II - 51 ～ II - 53 においては、最小値、最高値を出し、その差を調べてみた。

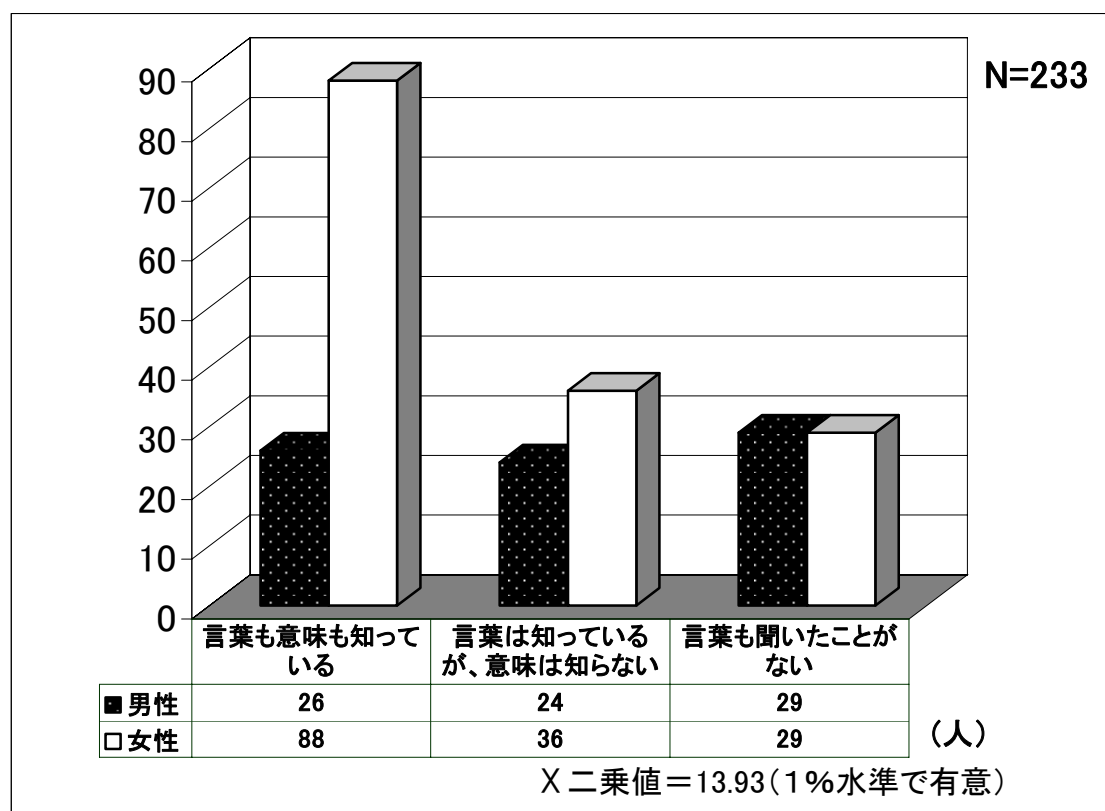
第Ⅱ章 結果と考察

1 STD・性行為に関する知識

(1) STD という言葉について

図表Ⅱ－１は、調査する以前から STD という言葉を知っているかを調査し、男女別に棒グラフにしたものである。ここでは意味の知識も質問し、より詳しく知識の状況を調べることができた。そして、男女の知識の比較を行った。

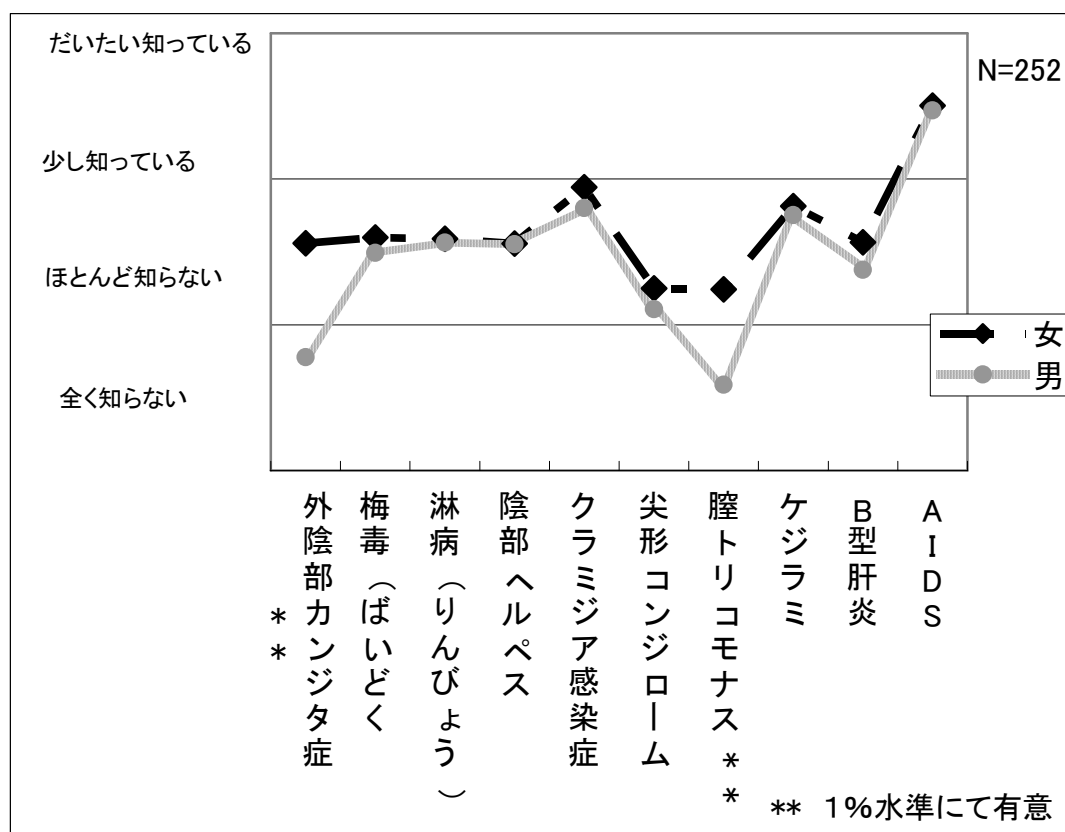
結果は、男性は答えにばらつきは見られなかったが、「言葉も聞いたことがない」と答えた人が一番多かった。女性に関しては、「言葉も意味も知っている」と答えた人が一番多く 88 人であった。これは男性に比べると女性の方が STD について感心を持っているということが明らかになった。



図表Ⅱ－１ STD という言葉について

(2) STD の具体的な病名の知識について

図表Ⅱ－２のグラフは、STD の具体的な病名を 10 個挙げ「1 まったく知らない」「2 ほとんど知らない」「3 少し知っている」「4 だいたい知っている」の 4 項目で回答を得た。ここでは女性の方が男性に比べると病名の知識があることがわかる。しかし、「AIDS」では男性も女性もほとんどの人が知っていることが明らかになった。これは、一般的に「AIDS」という言葉が広く知られているということが上げられる。「外陰部カンジタ症」「膣トリコモナス」では、男女の差が多く開いており、女性の知識が多いことが明らかになった。これは、「外陰部カンジタ症」「膣トリコモナス」が感染する確率は女性に多いということが差の主な原因ではないだろうか。

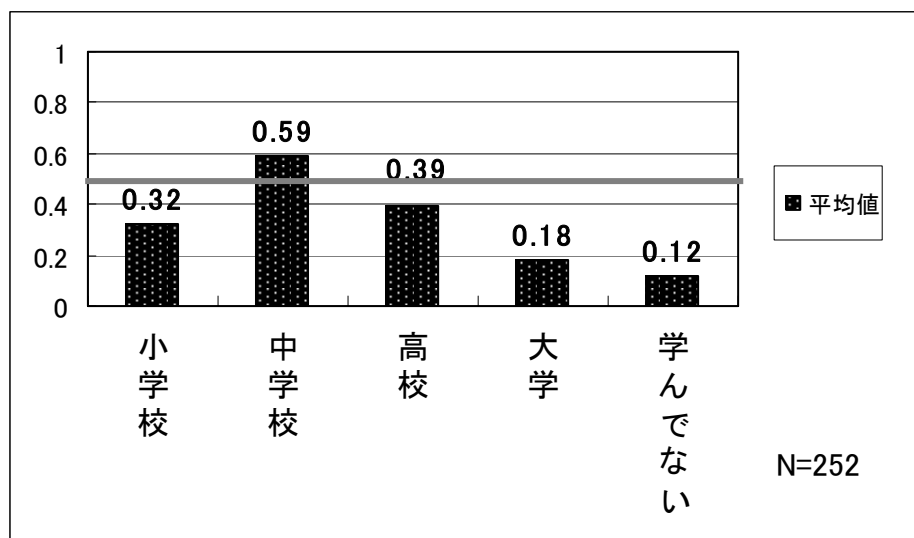


図表Ⅱ－２ STD の具体的な病名の知識について

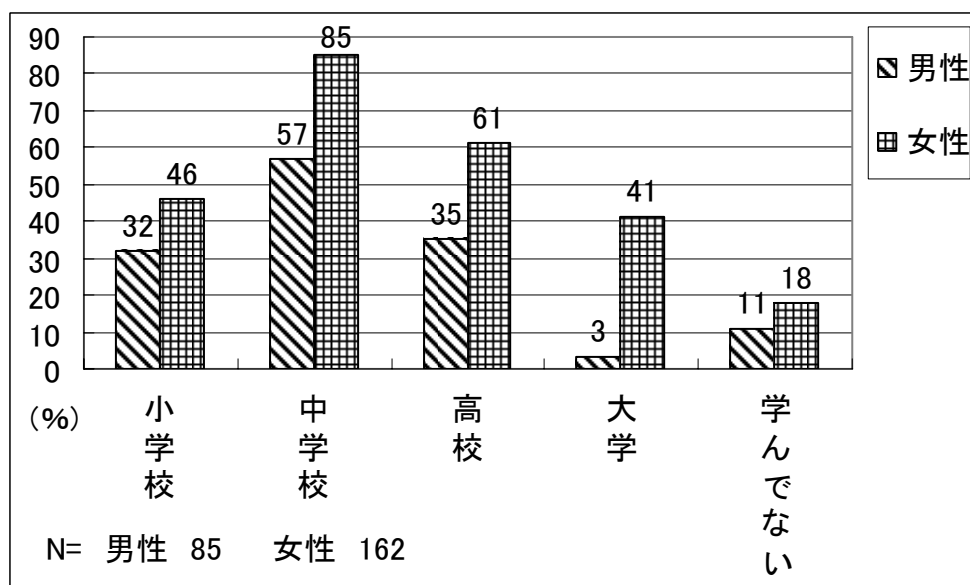
(3) 性行為について学んだ段階について

図表Ⅱ－３は、性行為について学んだ段階を段階別に調査し、棒グラフに表したものである。黒い線は平均を示している。中学校と答えた人が平均値を越しているので、中学校で性行為について学ぶ学校が多いことがわかる。ほとんどの段階で平均を超えていないということは、多くの学校で、性行為について学ばないといえるのではないか。

図表Ⅱ－４は、男女の比較を表している。女性は、大学で学んでいる人がいるが、それに比べ男性はほとんどいない。これは、大学や短大、専門学校で幼児教育や教育関係を専攻し、学んでいる人が多い為だと言えるだろう。



図表Ⅱ－３ 学校教育のどの段階で性行為について学んだか（全体）

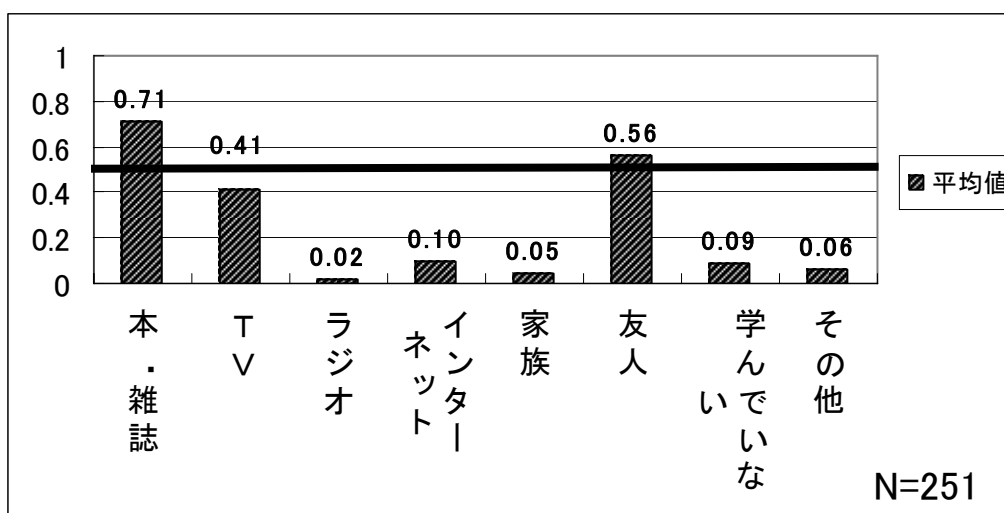


図表Ⅱ－４ 学校教育のどの段階で性行為について学んだか（男女の比較）

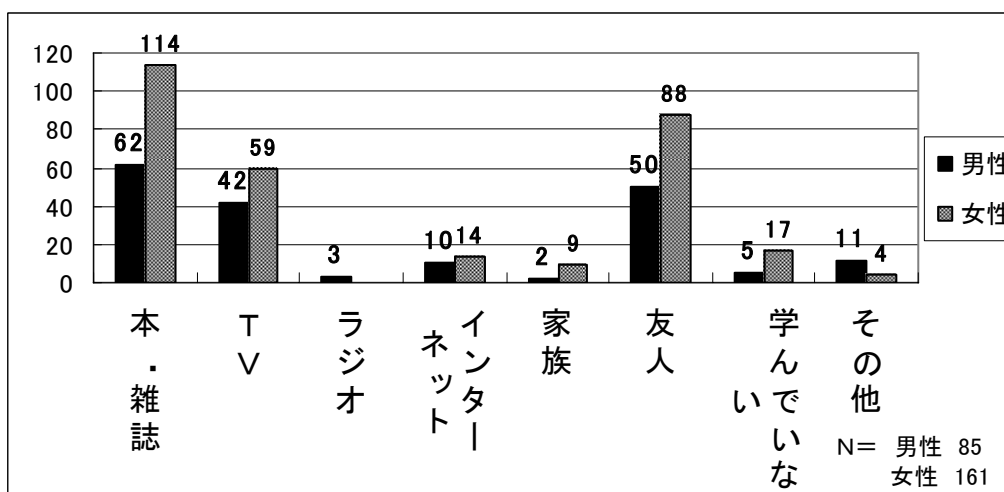
(4) 学校以外で性行為を学んだ場所

図表Ⅱ－５では、学校教育以外で学んだ場所について８つの項目を複数回答可で調査したものである。黒い線は平均を示している。ほとんどが平均を超えていない中、「本・雑誌」「友人」が、平均を超えている。又、「本・雑誌」が最も多い結果となった。これは、多くの人が身近なもの、すぐ手に届くものから学んでいることが明らかになった。「その他」と答えた人で多く見られたのは「ビデオ」という回答である。

図表Ⅱ－６は、男女の比較を表したものである。これを見ると、情報収集源は男女の差はないといえる。



図表Ⅱ－５ 学校教育以外のどこで性行為について学んだか（男女の比較）

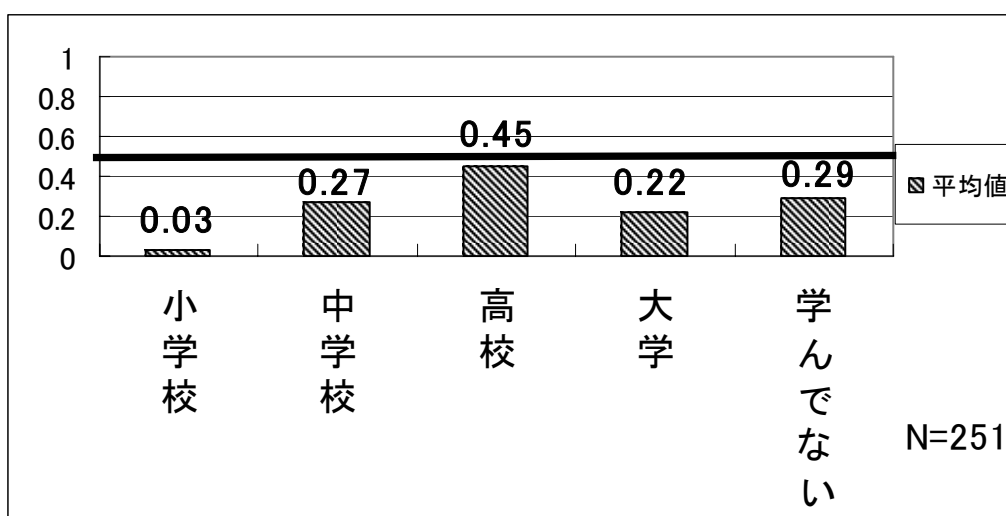


図表Ⅱ－６ 学校教育以外のどこで性行為について学んだか（男女の比較）

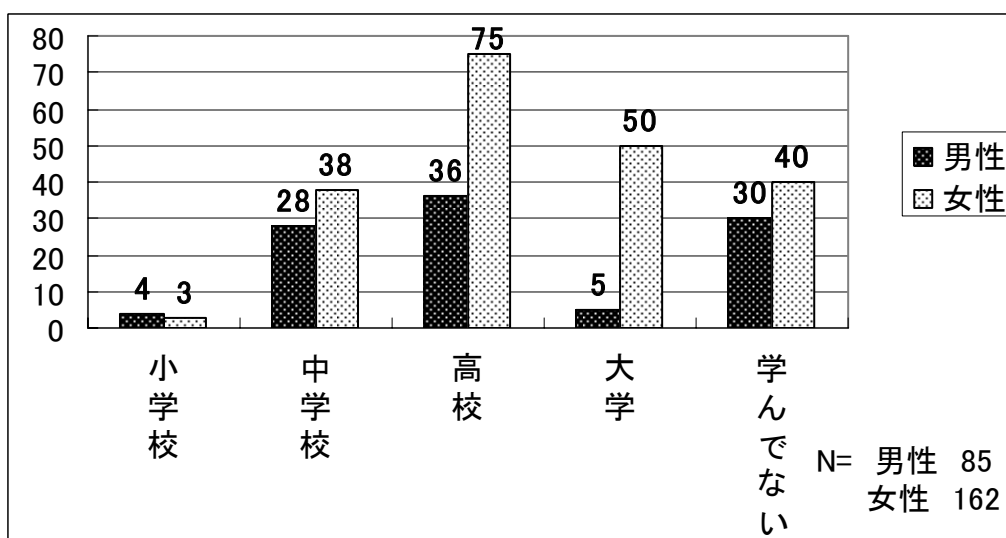
(5) STD について学んだ段階について

図表Ⅱ－７は、STD について学んだ段階を段階別に調査し、棒グラフに表したものである。黒い線は平均を示している。平均を超えているものが一つも無い事から、STD について教える学校が全体的に少ないことが明らかになった。少ない中で、高校で学んだという人が一番多いとわかる。

図表Ⅱ－８は、男女の比較を表している。性行為と同じで、女性が大学で学んでいる人が多いが、男性はほとんどいない。これは、幼児教育や教育関係を専攻し、学んでいる人が多い為だと言えるのではないか。



図表Ⅱ－７ STDについて学んだ場所（男女の比較）

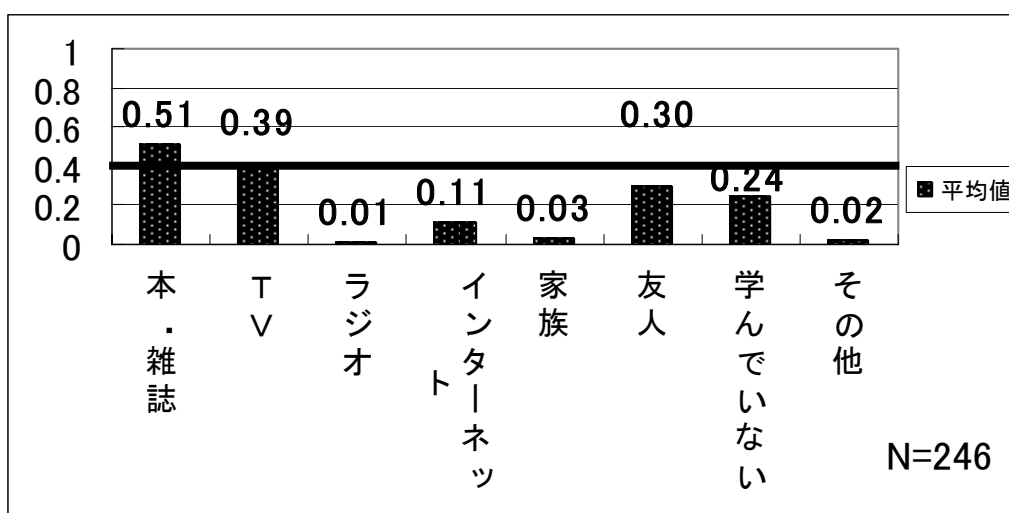


図表Ⅱ－８ STDについて学んだ場所（全体）

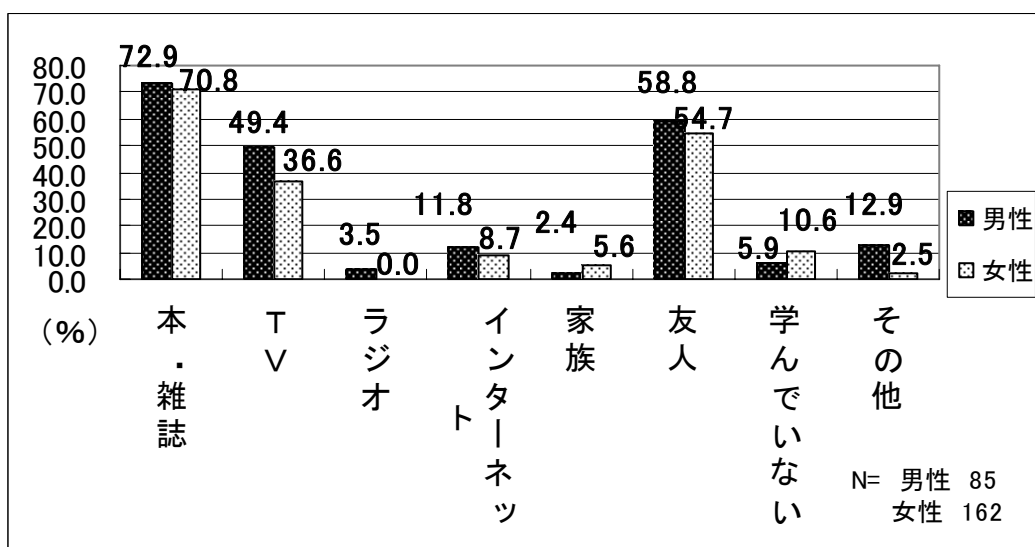
(6) 学校以外でSTDについて学んだ場所

図表Ⅱ－9は、学校以外でSTDについて学んだ場所を8つの項目にわけ、複数回答可で調査したものである。「本・雑誌」が平均を超え、続いて「TV」「友人」となっている。これも、性行為についてと同じで身近なもの、そして手の届きやすいものから学んでいることが明らかになった。この結果から、現代の若者の知識の収集源は、学校ではないと言える。

図表Ⅱ－10は、男女の比較を表したものだ。この結果から、男女差に大きな差はないと言える。



図表Ⅱ－9 学校以外でSTDについて学んだ場所

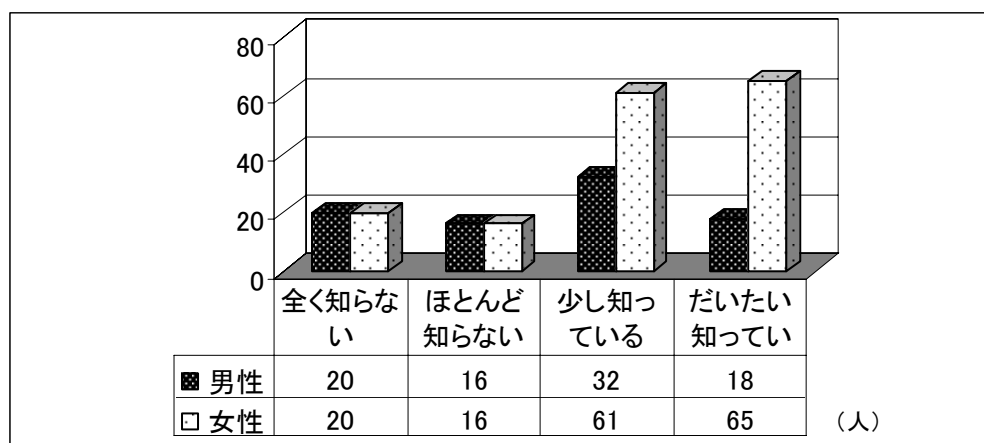


図表Ⅱ－10 学校以外でSTDについて学んだ場所

(7) STDの中には、自覚症状があまりでないものもあることを知っているか

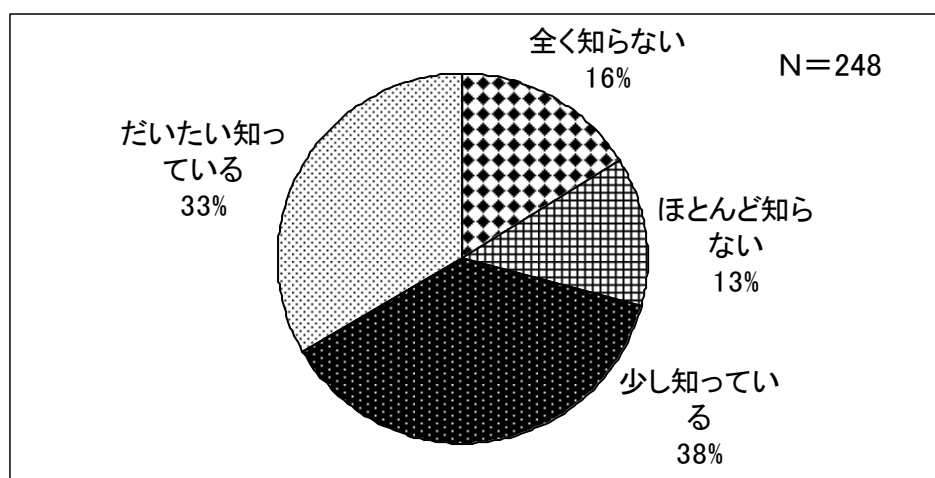
図表Ⅱ－１１は、「STDの中には、自覚症状があまりでないものもあることを知っているか」を男女の比較の棒グラフを表したものである。「全く知らない」「ほとんど知らない」「少し知っている」「だいたい知っている」の４項目にわけ、最も当てはまるものを回答してもらった。女性は、「全く知らない」「ほとんど知らない」と答えた人は少ない結果となった。一方、男性は全体的にばらつきがなく、少し知っている人が多い。この結果から、女性は男性よりSTDに関心をもっていると言える。

図表Ⅱ－１２は、全体を「％」で表したものである。知っている人が過半数をしめていることが明らかになった。



図表Ⅱ－１１

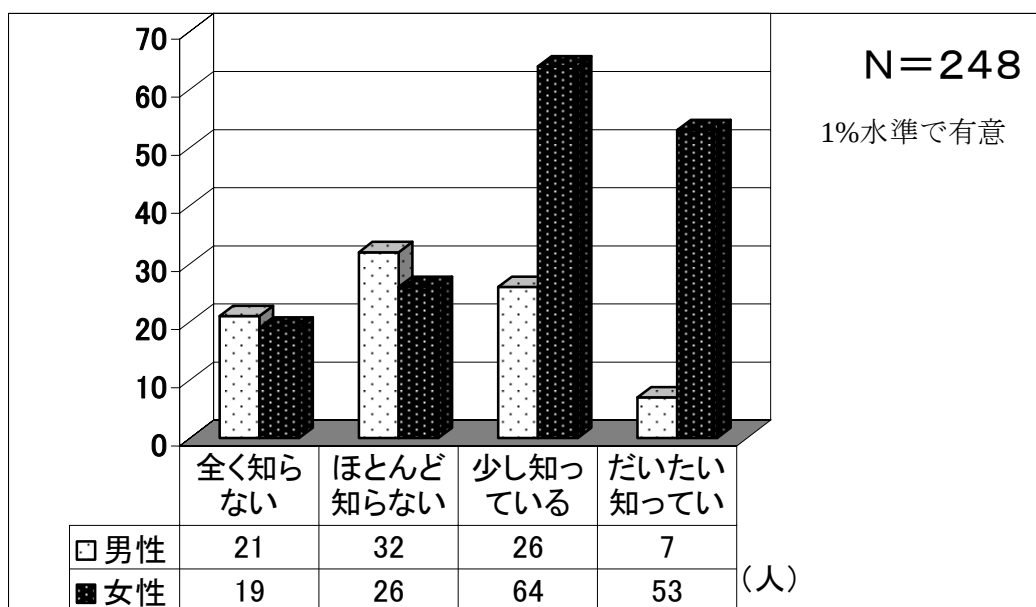
STDの中には自覚症状があまりでないものもあることを知っているか



図表Ⅱ－１２

STDの中には自覚症状があまりでないものもあることを知っているか
 (8) STDの影響で、不妊症や、流産をすることがあります。
 それについて貴方は、知識がありますか。

図表Ⅱ－１３では、「STDの影響で不妊症や流産をすることがある」ことについて知識があるかを調べ、男女の比較の棒グラフを表したものである。女性は、「少し知っている」が一番多く、それに続き、「だいたい知っている」が多い。これに対し、男性は「ほとんど知らない」が一番多く、「だいたい知っている」が一番少ない。この結果から男性は知識がないと言える。不妊症や、流産といった女性にとって多い病気だからなのではないだろうか。



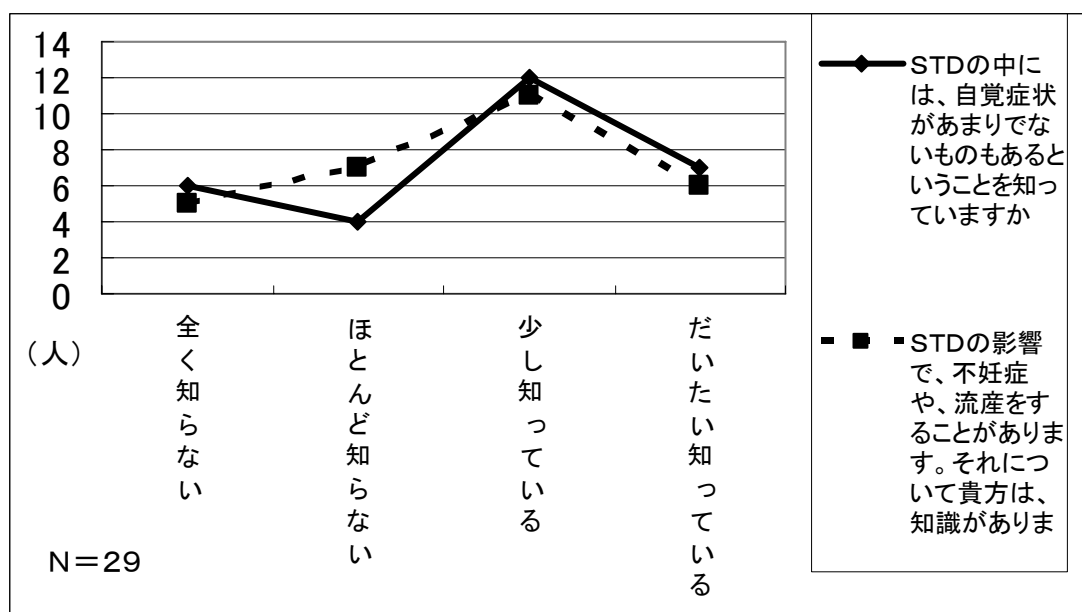
図表Ⅱ－１３

STDの影響で、不妊症や流産をすることがあることについて知識はあるか。

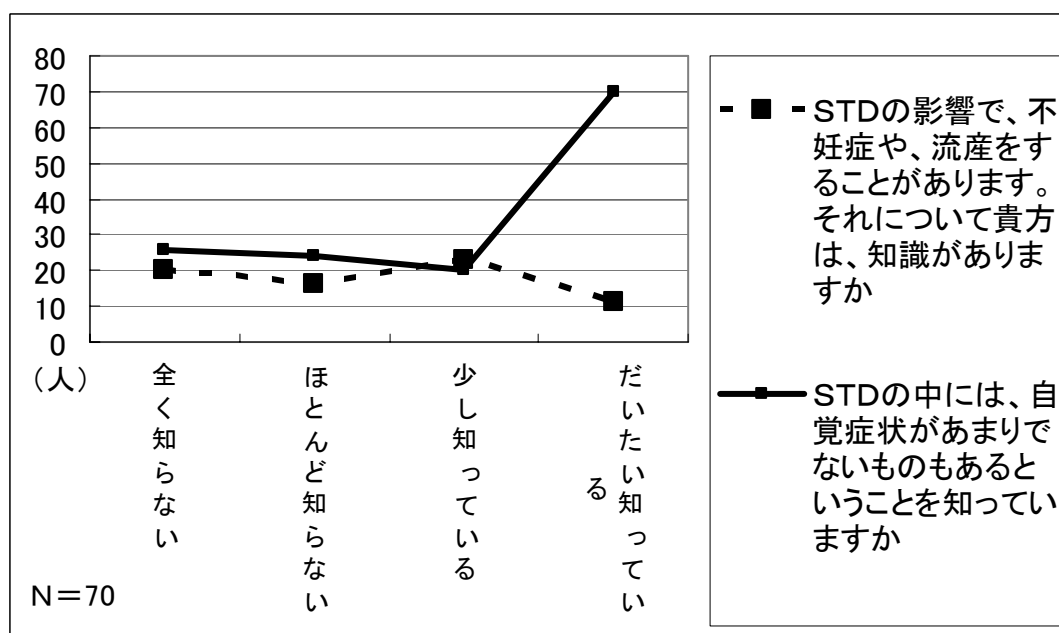
図表Ⅱ－１４は、学校教育の段階で「性行為を学んだことのない人」の知識を折れ線グラフに表したものである。中でも「少し知っている」が多い結果となった。学校教育の段階で「性行為を学んだことのない人」でも、「STDの中には、自覚症状がでないものもある」ということ、「STDの影響で、不妊症や流産をすることがあること」を知っている人が多かった。この結果から、学校教育以外で性行為について学べるものがあるということが明らかになった。

図表Ⅱ－１５は、学校教育の段階で「STDを学んだことのない人」の知識を折れ線グラフに表したものである。「STDの中には、自覚症状がでないものもある」というこ

とを知っているか」という質問では、「だいたい知っている」が圧倒的に多かった。この結果から、学校教育で学んでいなくても知識はあると言える。しかし、「STDの影響で流産や不妊症になることがある」という質問に対しては、多くの人が知識がないことが明らかになった。

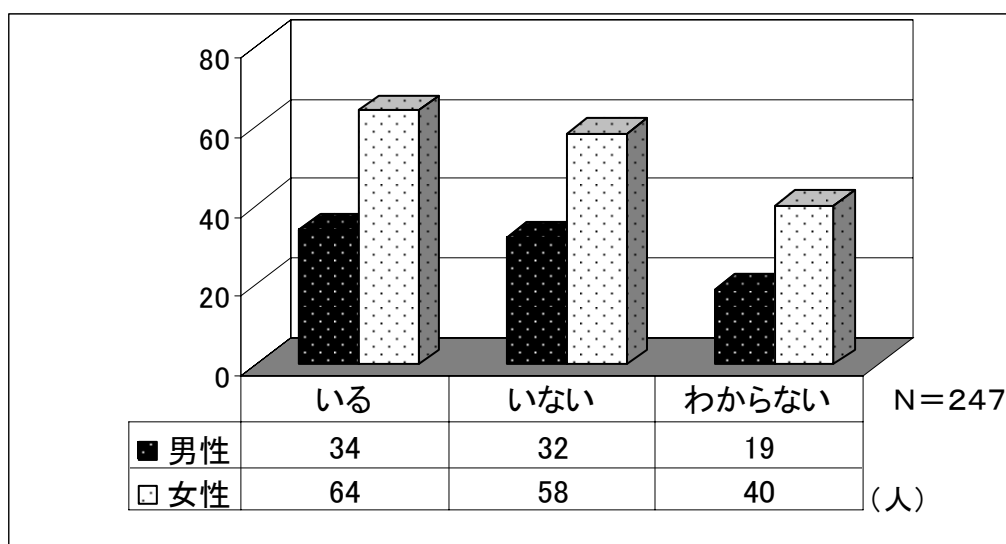


図表Ⅱ－１４ 学校教育の段階で性行為を学んだことのない人の
STDに関する知識

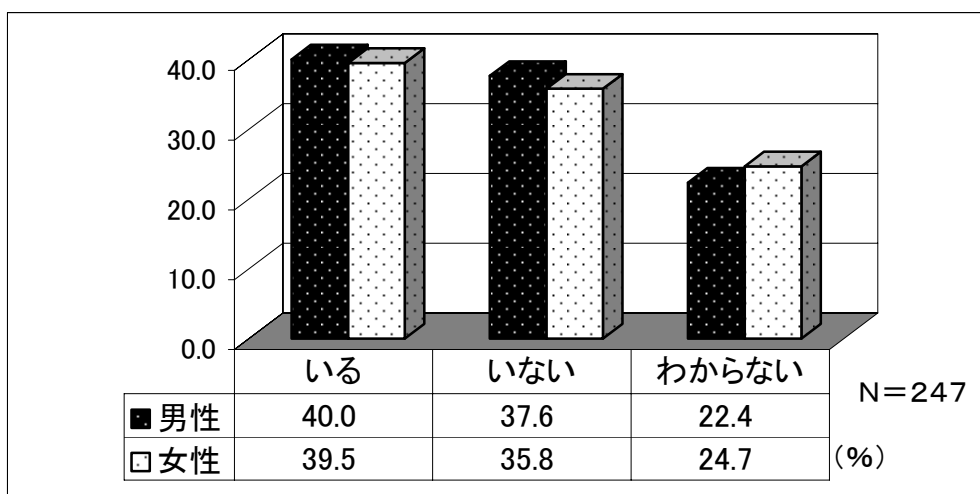


図表Ⅱ－１５ 学校教育の段階でSTDを学んだことのない人の知識
(9) 身近な人(家族・友人など…)のSTD感染の認識

図表Ⅱ－１６とⅡ－１７は、「身近な人(家族・友人など…)がSTDになったことがあるか」の認識を棒グラフで表したものである。図表Ⅱ－１６は、男女別に人数で表したものである。図表Ⅱ－１７は男女別に「%」で表したものである。
男女共に、「わからない」と答えた人が最も少ないことが明らかになった。そして、「いる」と答えた人が最も多かった。これは、身近な人同士がSTDについて認識し合っているということが明らかになった。一見、話しにくい内容だと感じるが身近な人に話すことには抵抗が無いと言えるのではないかな。



図表Ⅱ－１６ 身近な人(家族・友人など…)のSTDになった人はいるか(人)



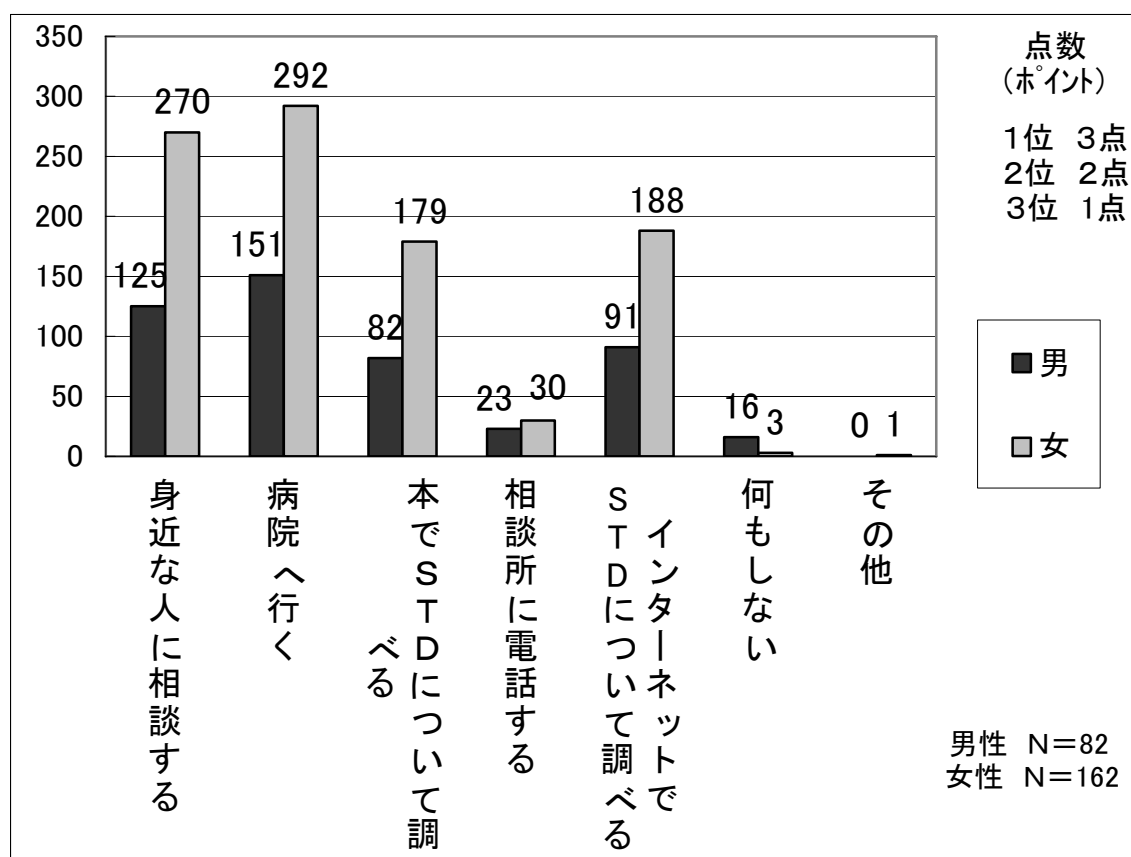
図表Ⅱ－１７ 身近な人（家族・友人など…）のSTDになった人はいるか（％）

２ STD・性行為に関する意識

（１） 自分自身がSTDではないかと不安になった時の行動について

図表Ⅱ－１８は、自分自身がSTDではないかと不安になった時どのような行動に出るかを7つの中から3位までの順位をつけた結果である。1位3点、2位2点、3位1点をつけ、得点式にあらわしたグラフである。結果は男女ともに同じ順位となった。1位「病院へ行く」男性→151点 女性→292点 2位「身近な人に相談する」男性→125点 女性 270点 3位「インターネットでSTDについて調べる」男性→91点 女性 188点 という結果となった。

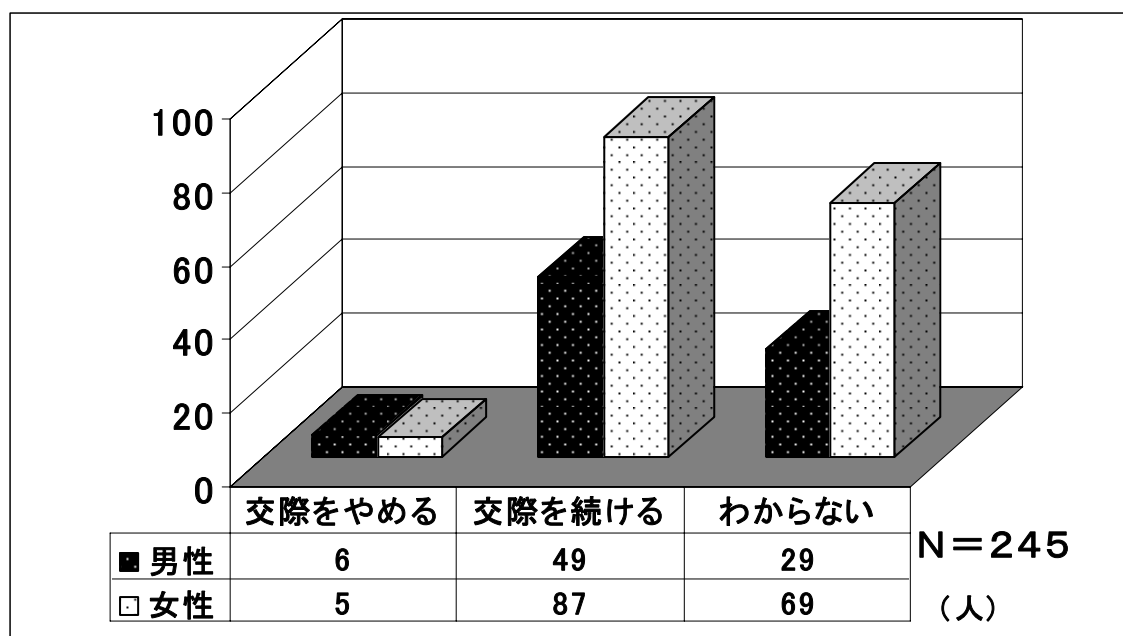
「病院へ行く」という答えが1位という結果は、性についてオープンでないと思っていた私達には予想外な回答といえる。STDに関して多くの人が重要と感じているという結果となった。3位の「本で調べる」と4位の「インターネットで調べる」が多かったことから、インターネットの普及、そして身近なものからの情報収集ができるということが明らかになった。



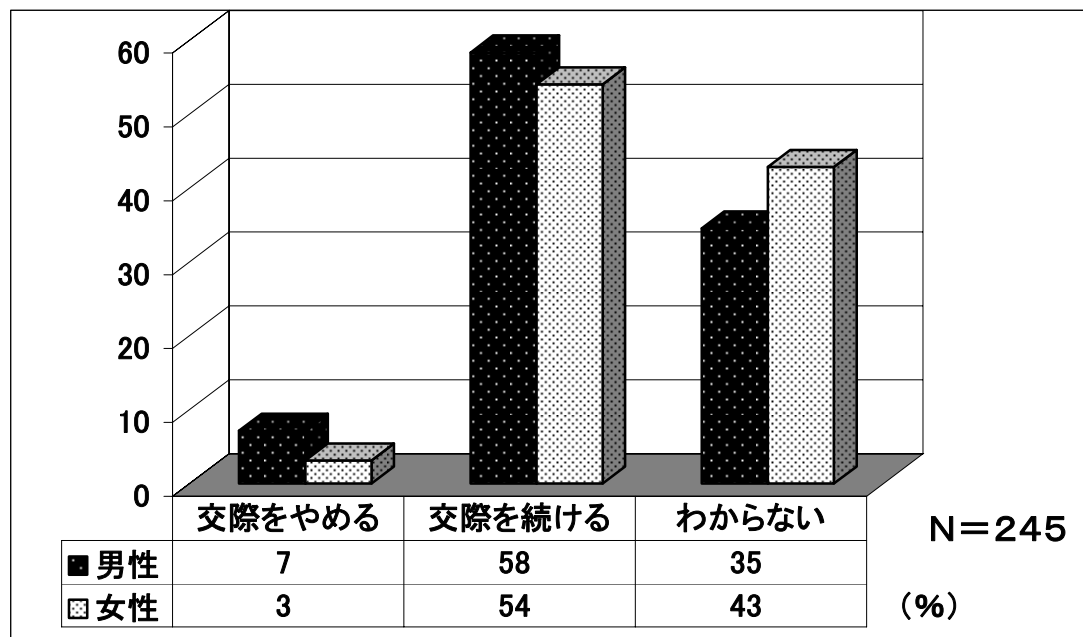
図表Ⅱ－１８

自分自身が STD ではないかと不安になった時、どのような行動に出ると思うか
 (2) 恋人（パートナー）が STD になったと知らされたら、
 交際を続けるか

図表Ⅱ－１９と図表Ⅱ－２０は、「恋人（性的パートナー）がSTDに感染したと知らされたら、交際を続けるか」を人数（図表Ⅱ－１９）と、「％」（図表Ⅱ－２０）で表したものである。「交際を続ける」と回答した人が最も多く、男性は49人（58％）、女性は87人（54％）という結果である。「交際をやめる」と回答した人が最も少なく、男性は6人（7％）、女性は5人（3％）という結果となった。「わからない」と回答した人が、男性は29人（35％）、女性は69人（43％）回答している。これは自分自身もSTDに感染してしまうかもしれないという不安を表しているといえるだろう。「わからない」という意見が一番素直な回答なのかもしれない。



図表Ⅱ－１９
 恋人（パートナー）がSTDになったら、交際を続けるか（人）



図表Ⅱ－２０

恋人（性的パートナー）がSTDになったら交際を続けるか（％）

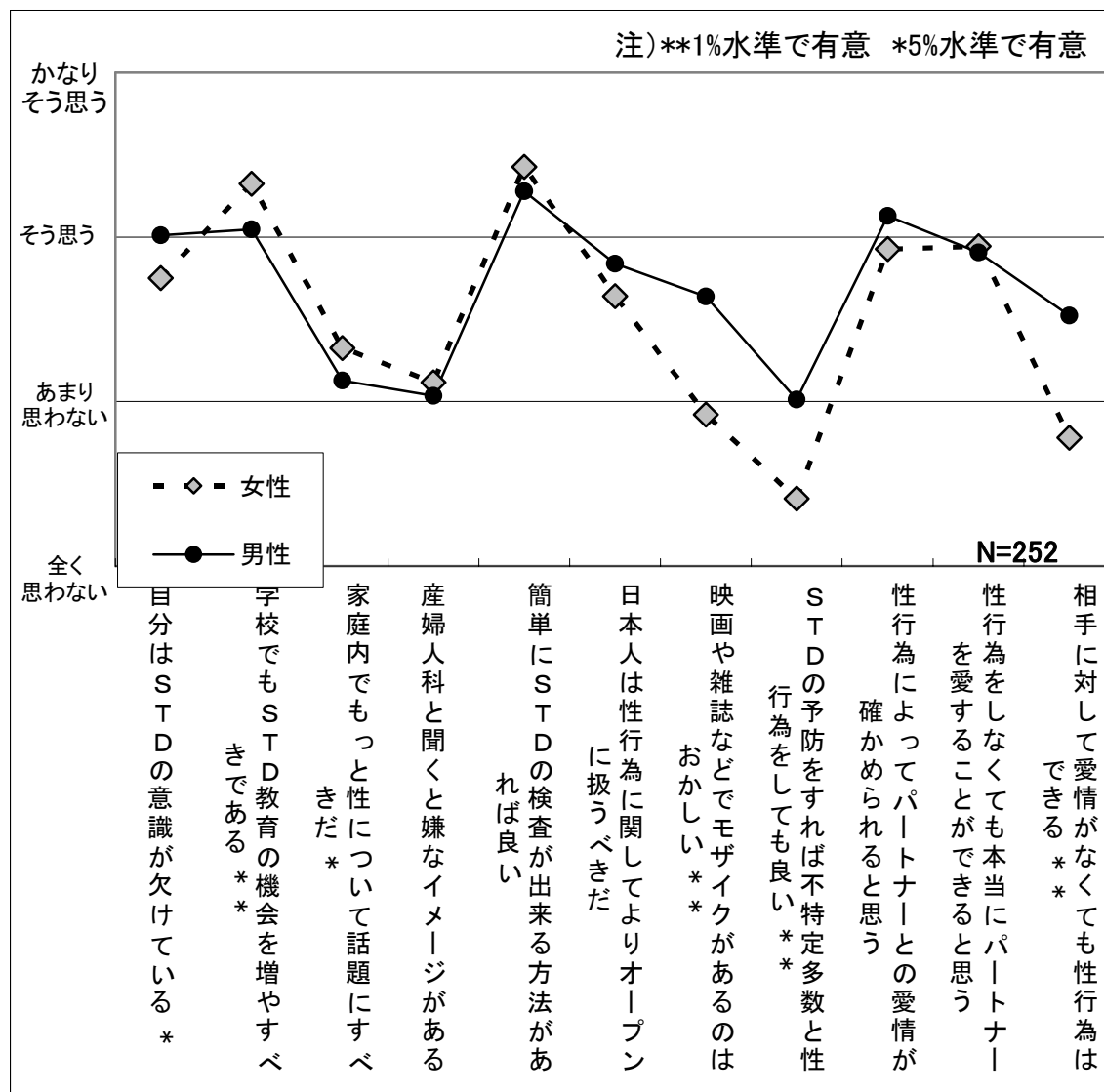
（３） 自分の意識

欧米では、若者の間でSTDが拡大している。その原因として考えられるのは、不特定多数との性行為、及びコンドームの利用率の低さが考えられている。今後、日本でも同様の現象が懸念されている。図表Ⅱ－２１はこの状況についてどのように考えるかを11個の質問を「全く思わない」「あまり思わない」「そう思う」「かなりそう思う」の4段階で回答したものである。

図表Ⅱ－２１は、自分の意識に最も近いものを回答してもらい、折れ線グラフに表した。「自分はSTDの知識が欠けている」「学校でもSTD教育の機会を増やすべきである」「簡単にSTDの検査が出来る方法があればよい」の質問では男女共に「そう思う」と回答した人が多かった。これは、STDについて感心があり、知識を増やしたいと思っている人が多いとみられる。

「STDの予防をすれば不特定多数と性行為をしてもよい」「相手に対して愛情が無くても性行為ができる」の質問では、男性と女性に差が見られた。又、「性行為によってパートナーとの愛情が確かめられると思う」「性行為をしなくても本当にパートナーを愛することができると思う」の質問では男女共に「そう思う」と回答した人が多かった。この2点を比較すると、性行為に関して女性は愛情と性行為は同じ事と考える人が多く、

男性は愛情と性行為を離して考えることができる人が多いという結果となった。



図表Ⅱ－２１
今の日本の現状についてあなたはどのように思いますか

図表Ⅱ－２１は、STDや日本の現状の意識調査について因子分析を行った結果を表したものである。因子の抽出には主因子法を使い、抽出後バリマックス回転を行った。なお各因子の因子得点係数行列も表示させた。調査票「性行為によってパートナーとの愛情を確かめられると思う」「性行為をしなくても本当にパートナーを愛することができると思う」は除外した。４つの因子の説明された分散は63.44%である。

第一因子は、愛情と性行為を別として考えていることを示す「愛がない」因子である。第二因子は、もっと性について話題にしたいことを示す「希望」因子、第三因子は、性

に関してもっとオープンにしたいことを示す「オープン派」因子、第四因子は、STDや性行為に対しての教育の場を増やしたいと示す「社会の問題」因子となった。

図表Ⅱ－２２は、各サンプルがどの因子タイプに属しているのかを調査した。方法は、図表Ⅱ－２２で表示させた因子得点を利用し、因子得点の最も高い因子タイプに属するようにした。

その結果、「愛がない」因子が71名、「希望」因子が73名、「オープン派」因子が46名、「社会の問題」因子が58人となった。

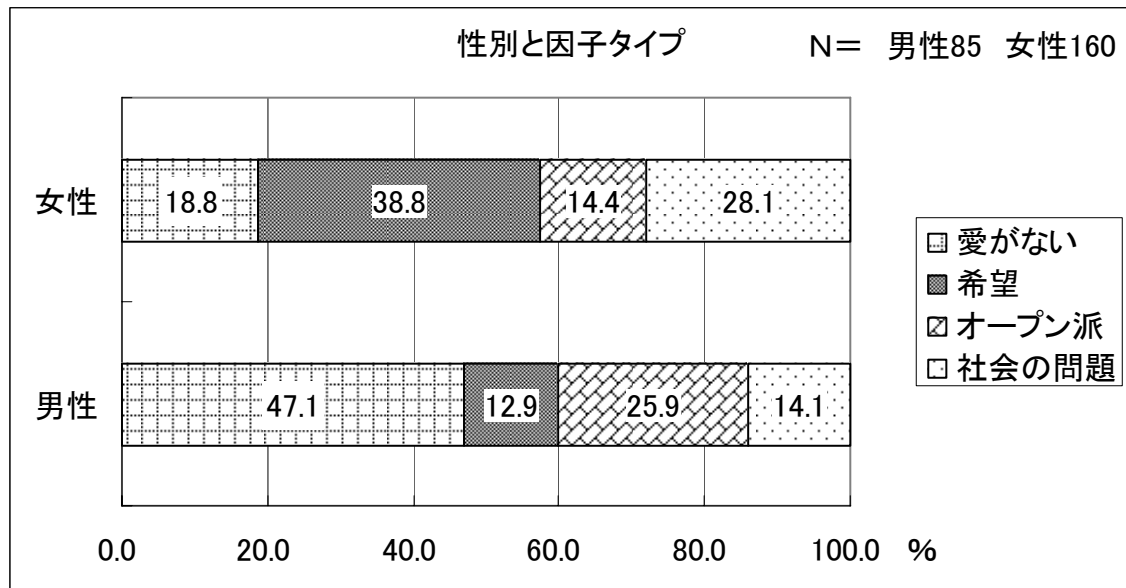
図表Ⅱ－２３は、4つの因子タイプに属する男女構成を調べるために、クロス集計を行い、グラフにしたものである。男性の割合が最も多かったのは、第一因子の「愛がない」の47.1%である。これは、女性の約2.5倍もの数字という結果となった。この結果から、男性は愛と性行為を別と考えている人が多く、女性は反対に少ないということが明らかになった。女性の割合が最も多かったのは、第二因子の「希望」38.8%であった。この結果から、女性はこれから性感染症を増やしたくないという気持ちが高いのではないだろうか。

因子

	第一因子 愛がない	第二因子 希望	第三因子 オープン派	第四因子 社会の問題
相手に対して愛情がなくても性行為はできる	0.8280	-0.0563	0.0021	0.0250
STDの予防をすれば不特定多数と性行為をしてもよい	0.6131	-0.0586	0.4234	-0.0736
自分はSTDの知識が欠けている	0.0194	-0.2213	-0.0200	0.0241
家庭内でもっと性について話題にすべきだ	-0.0225	0.8638	0.0431	0.1152
映画や雑誌などでモザイクがあるのはおかしい	0.2550	-0.1190	0.5439	-0.0144
日本人は性行為に関してよりオープンに扱うべきだ	0.1566	0.0910	0.3386	0.2500
産婦人科と聞くと嫌なイメージがある	-0.0495	0.0755	0.2894	-0.0902
簡単にSTDの検査ができる方法があればよい	0.0005	-0.0848	-0.0234	0.5410
学校でもSTD教育の機会を増やすべきである	-0.0871	0.3822	-0.1201	0.5134

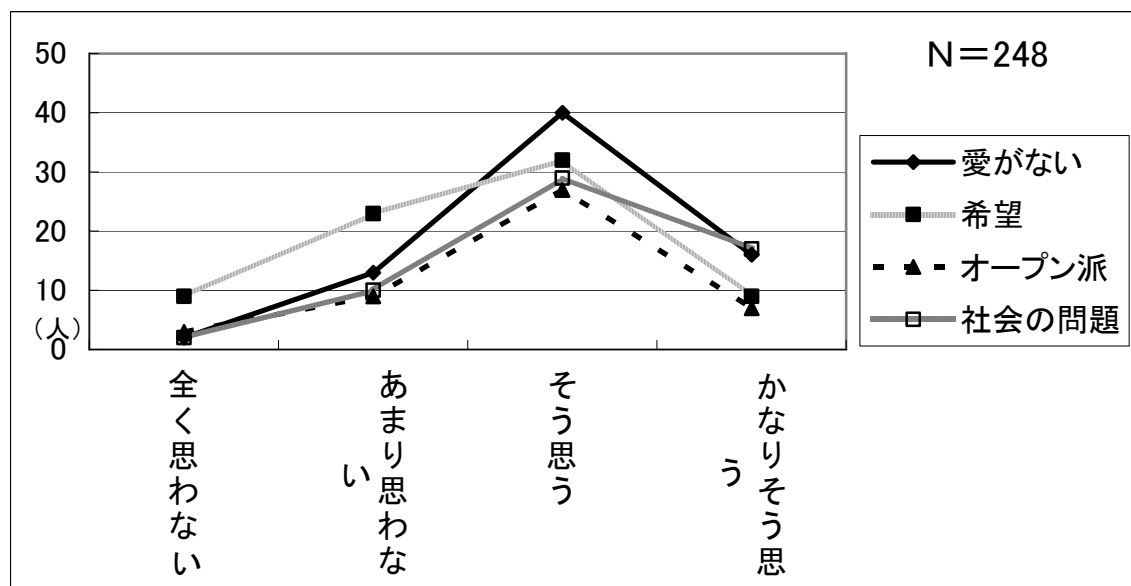
愛がないN=71 N希望=73 オープン派N=46 社会の問題N=58

図表Ⅱ－２２ 回転後の因子行列



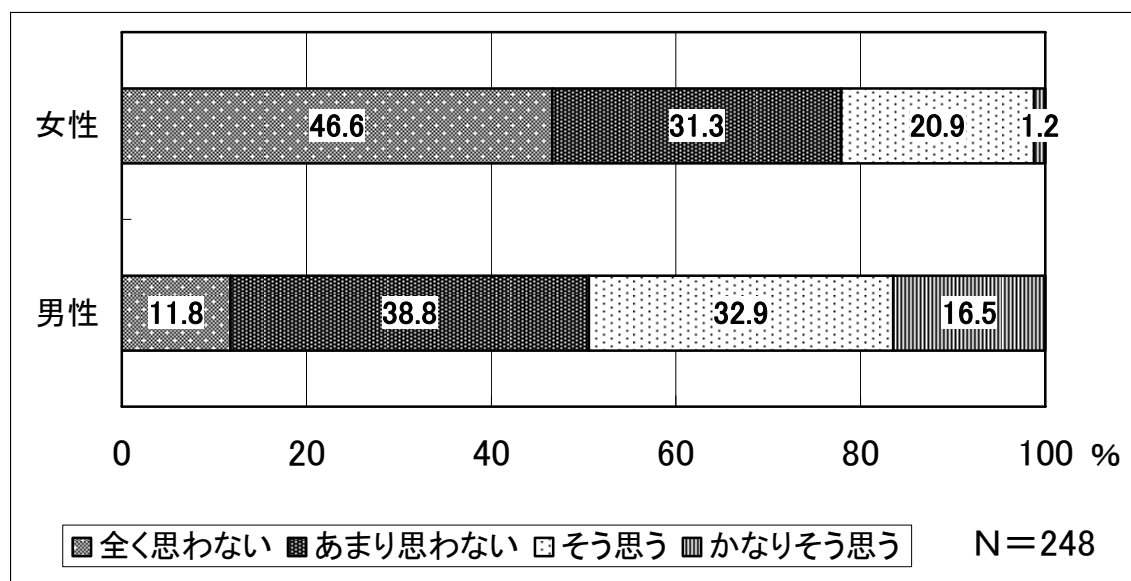
図表Ⅱ－２３ 性別と因子タイプ

図表Ⅱ－２４は、調査票「自分はSTDの知識が欠けている」の質問に対して、因子タイプ別のクロス集計を行い、折れ線グラフに表したものである。「愛がない」因子が予想外にもSTDに興味を示している結果となった。



図表Ⅱ－２４ 自分はSTDの意識が欠けている（因子分析）

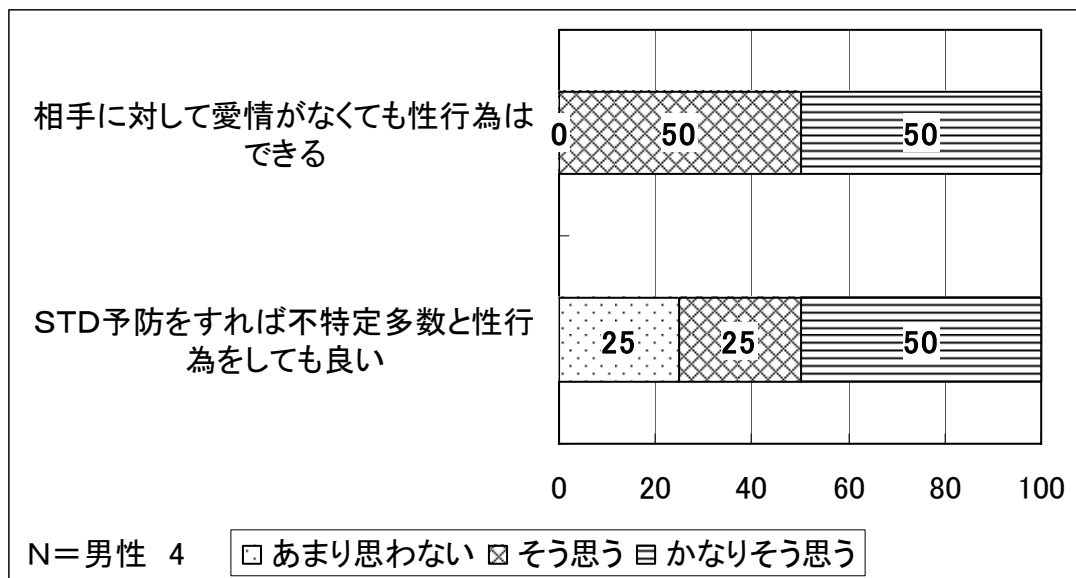
図表Ⅱ－２５は、調査票「相手に愛情がなくても性行為はできる」を「全く思わない」「あまり思わない」「そう思う」「かなりそう思う」の４項目にわけ自分の意識に最も近いものを選んでもらった。男女別に棒グラフで表したものである。女性は、「全く思わない」46.6%が圧倒的に多い。男性は、「あまり思わない」38.8%が多かった。しかし、女性は、「かなりそう思う」が1.2%に対し、男性は16.5%もあることがわかる。



図表Ⅱ－２５ 相手に愛情がなくても性行為はできる

図表Ⅱ－２６は、「複数のパートナーがいる人」の意識を横棒グラフで表したものである。調査票で複数のパートナーがいる人は４人という結果となった。「相手に愛情がなくても性行為はできる」の質問では、「かなりそう思う」「そう思う」だけであった。

この表から、「愛がなくても性行為はできる」そして、パートナーを限定するのではなく、「STDの予防をすれば不特定多数との性行為をしても良い」と考えている人がほとんどだということがわかった。又、アンケートの結果から複数のパートナーがいるのは男性だけであることが明らかになった。

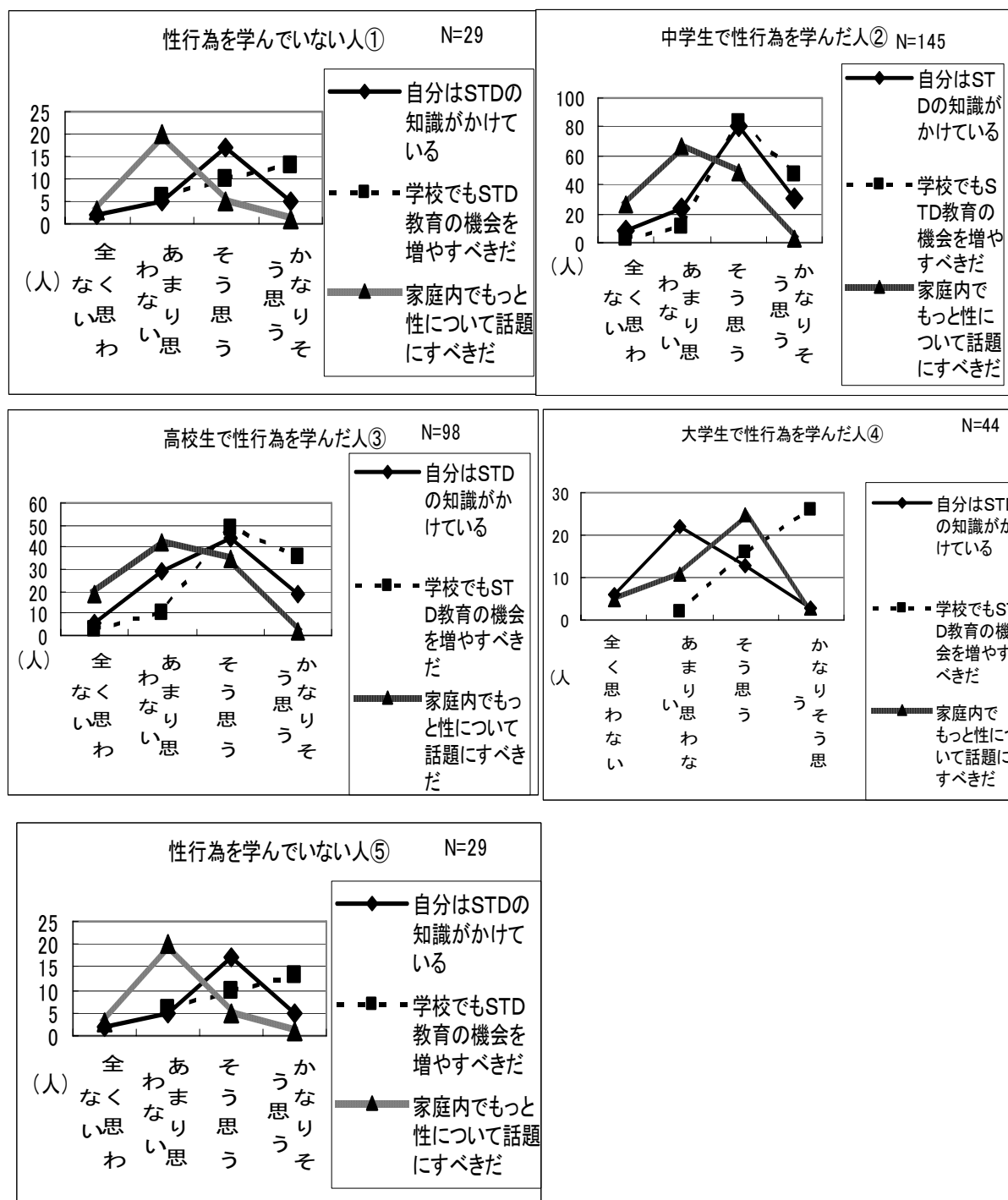


図表Ⅱ－２６ 複数パートナーがいる人の知識

図表Ⅱ－２７は、学校教育段階のどの段階で学んだかを集計し、「自分はSTDの意識が欠けている」「学校でもSTD教育の機会を増やすべきである」「家庭内でもっと性について話題にすべきだ」をクロス集計し、学校教育段階に分け、折れ線グラフに表したものである。「小学校」、「中学校」、「高校」で性行為を学んだ人のグラフは差がない結果となった。しかし、「大学生」で学んだ人は「自分はSTDの意識が欠けている」という項目は「あまり思わない」が１位であった。これは、大学で教育関連の学部の人が多いためである。

「学校でもSTD教育の場を増やすべきである」という項目が「かなりそう思う」が１位だった。これは、自分自身が学んで良かったので、他の人にもそのような場を増やしたほうがよいと思っているのではないだろうか。

「性行為」について学んでいない人は、「家庭内でもっと性について話題にすべきだ」という項目は「あまり思わない」が１位である。この結果から、性については家庭で学びたくないことがわかった。又、自分自身の意識が欠けていると自覚していることが明らかになった。

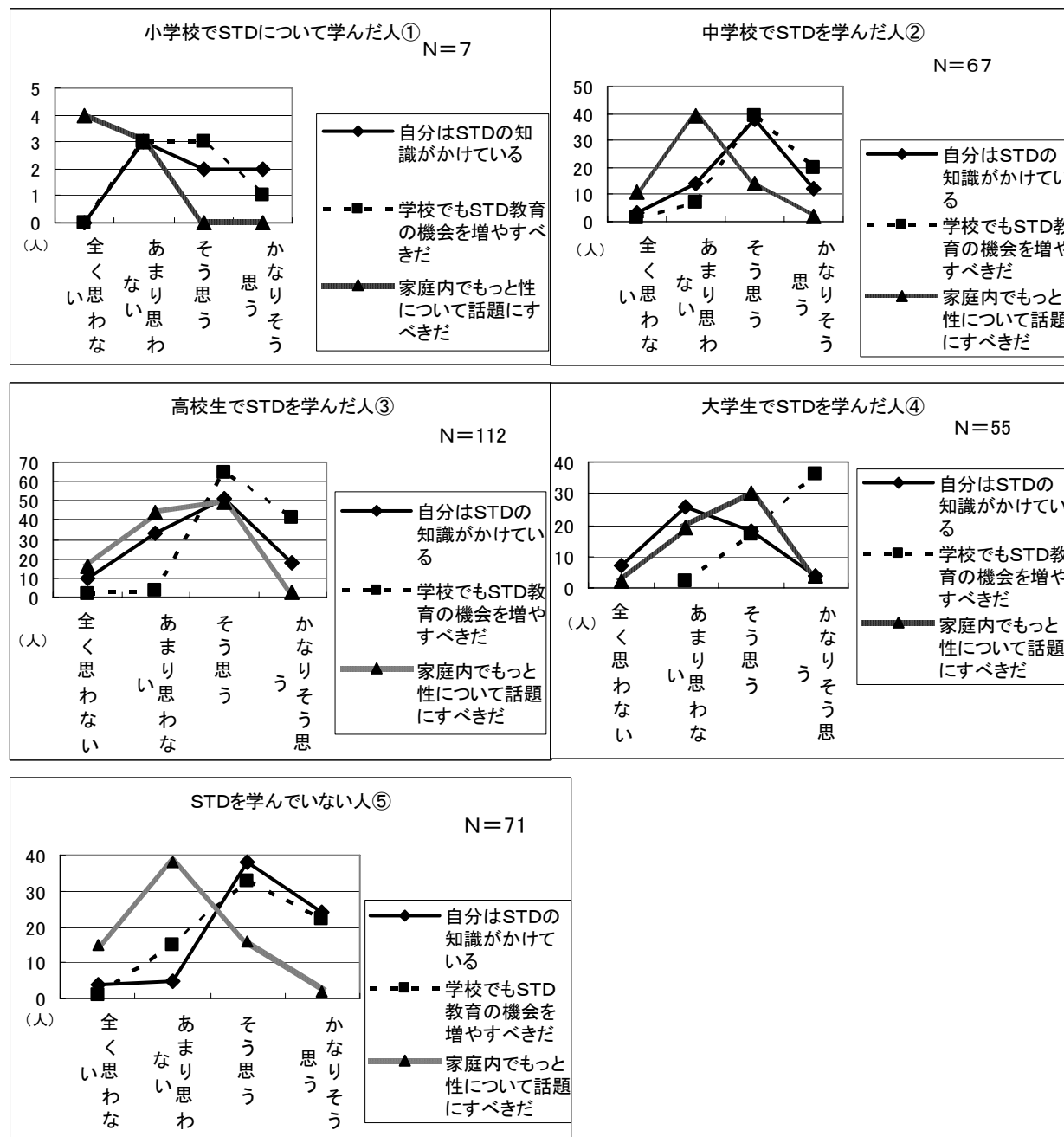


図表Ⅱ－２７①～⑤ 学校教育段階のどこで学んだか（性行為）

図Ⅱ－２８は、学校教育段階でSTDをどこで学んだかを集計し、「自分はSTDの意識が欠けている」「学校でもSTD教育の機会を増やすべきである」「家庭内でもっと

性について話題にすべきだ」をクロス集計し、学校教育段階に分け折れ線グラフに表したものである。この結果から、「小学生」で「STD」について学んだ人は、「自分はSTDの知識がかけている」と思っている人は少ないことが明らかになった。

「学校教育でもSTD教育の機会を増やすべきだ」の項目では、「高校」で「STD」を学んだ人は、「そう思う」が多く、「大学」で「STD」を学んだ人は「かなりそう思う」が圧倒的に多い結果となった。

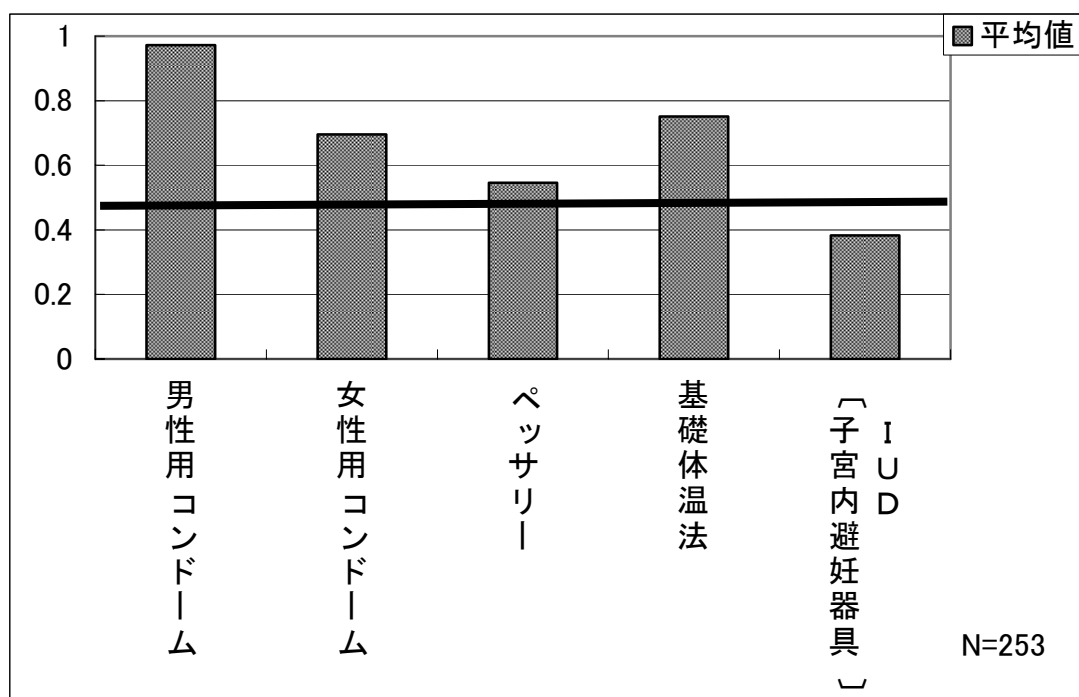


図表Ⅱ－28①～⑤ 学校教育段階のどこで学んだか（STD）

3 避妊用具の意識と知識

(1) 知っている避妊用具について

図表Ⅱ－29は、5つの避妊用具を項目として、避妊用具の知識について調査し、グラフに表したものである。横の黒い線は平均値を示したものである。「男性用コンドーム」「女性用コンドーム」「基礎体温法」「ペッサリー」が平均値を超えており、「IUD〔子宮内避妊器具〕」が平均値を超えていない。この結果から、「IUD〔子宮内避妊器具〕」は知られていないことが明らかになった。

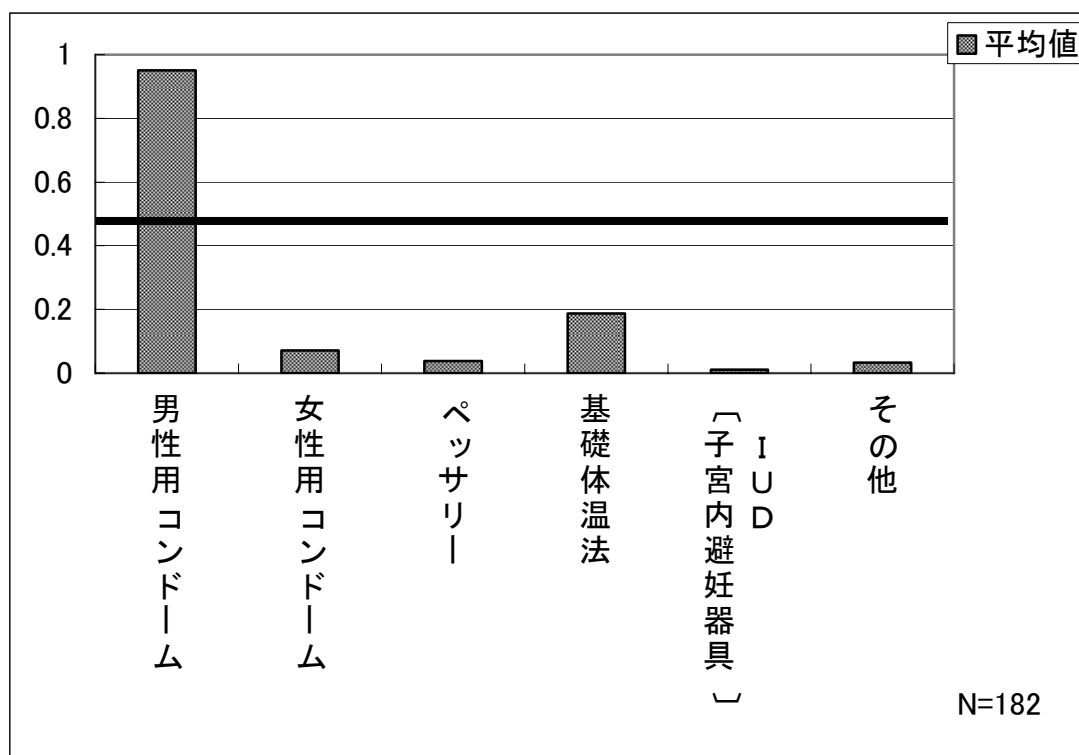


図表Ⅱ－29 知っている避妊用具について

(2) 避妊用具の使用値について

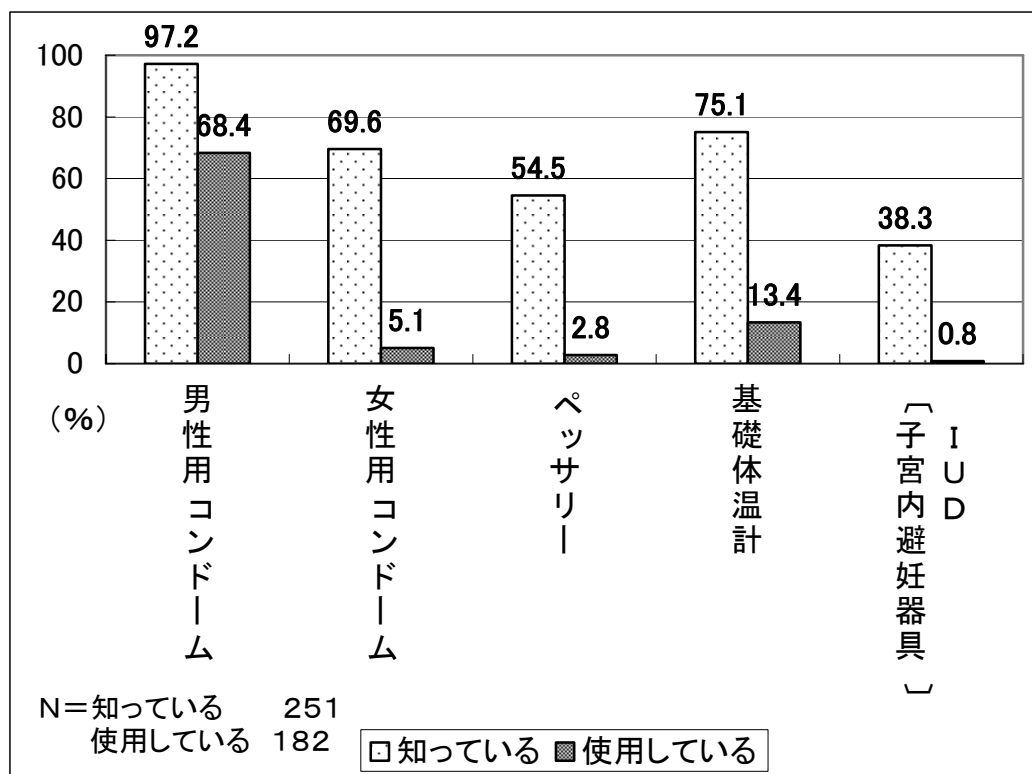
図表Ⅱ－30も同様に5つの避妊用具を項目として、使用したことがあるかを調査し、グラフに表したものである。圧倒的に多かったのは「男性用コンドーム」である。「男性用コンドーム」はコンビニエンスストアなどで購入できるように、手軽で身近な場所で手に入る為、使用する人も多いのではないかと推察される。「女性用コンドーム」「ペッサリー」「IUD〔子宮内避妊用具〕」では、知識があっても使用した人は少ないことが明らかになった。

これは、手軽に購入できない点と、周囲に使用している人が少ないということが原因と考えられる。「その他」では「ピル」などという回答があった。様々な避妊用具が、現在広まってきているが、「男性用コンドーム」に比べると、認識されていないことが明らかになった。



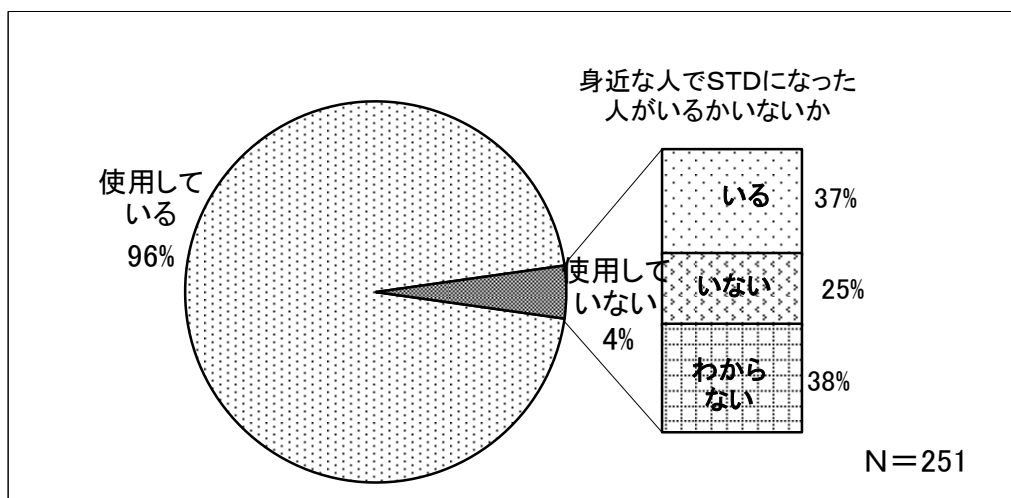
図表Ⅱ－３０ 避妊用具の使用の有無

図表Ⅱ－３１では、避妊用具を「知っている」か「使用している」かを、「%」で表したものである。この結果から、「男性用コンドーム」は、知られており、又使用していることがわかった。他の避妊用具は、知っていても使用していないものが多いことが明らかになった。



図表Ⅱ－３１ 避妊用具の知識と使用の有無

図表Ⅱ－３２は、「男性用コンドーム」の使用の有無を円グラフで表したものである。「男性用コンドーム」を使用していない人の中で「身近な人でSTDになった人」がいるか、いないかを表した。回答に差はなかった。使用していない人の方がSTDに感染する確立は高いと予想していたが、予想に反した結果となった。コンドームを使用していなくても、特定のパートナーだけなら、感染も防げるのだろう。

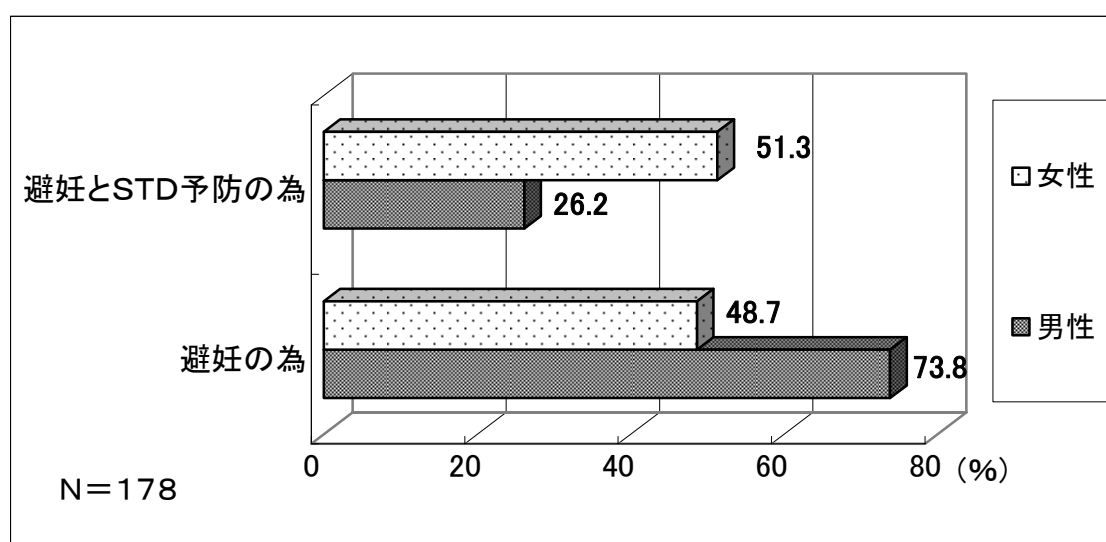


図表Ⅱ－３２ コンドームを使用しない人の身近な人でSTDになった人はいるか

(3) コンドームの使用目的について

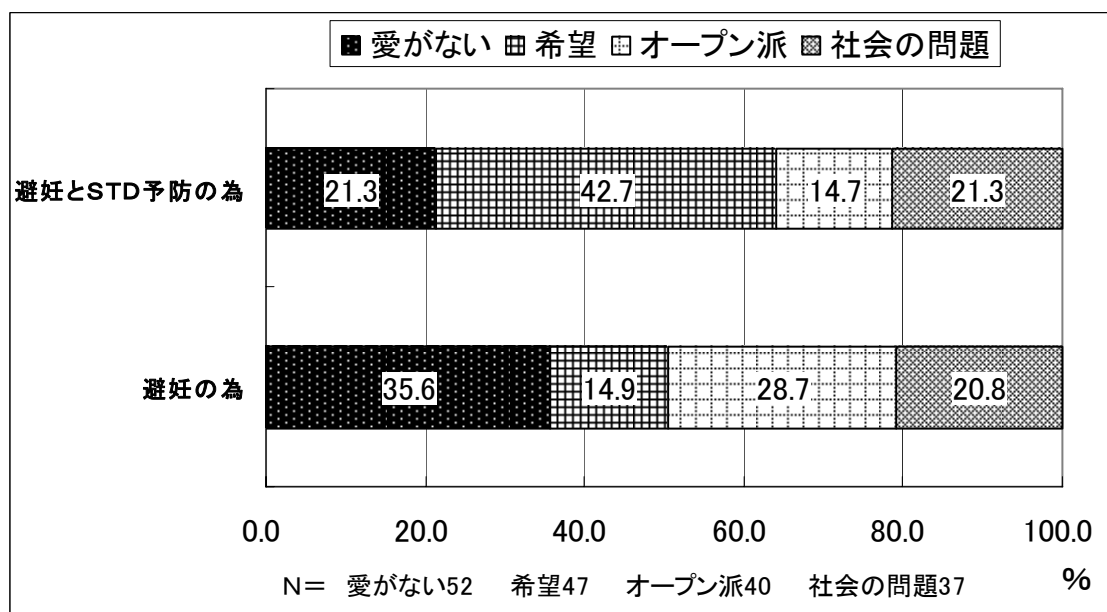
図表Ⅱ－３３は「男性用コンドーム」の使用目的について「避妊の為」「STDの予防の為」「避妊とSTDの予防の為」の３つの項目から回答し、グラフにしたものである。

結果は、「STDの予防の為」と答えた人は０％だった。男性が「避妊の為」と回答した人が最も多く、73.8%である。女性は「避妊とSTD予防の為」と答えた人が「避妊の為」と回答した人より若干多く、51.3%である。男性より女性のほうがSTDについて考えていることが明らかになった。



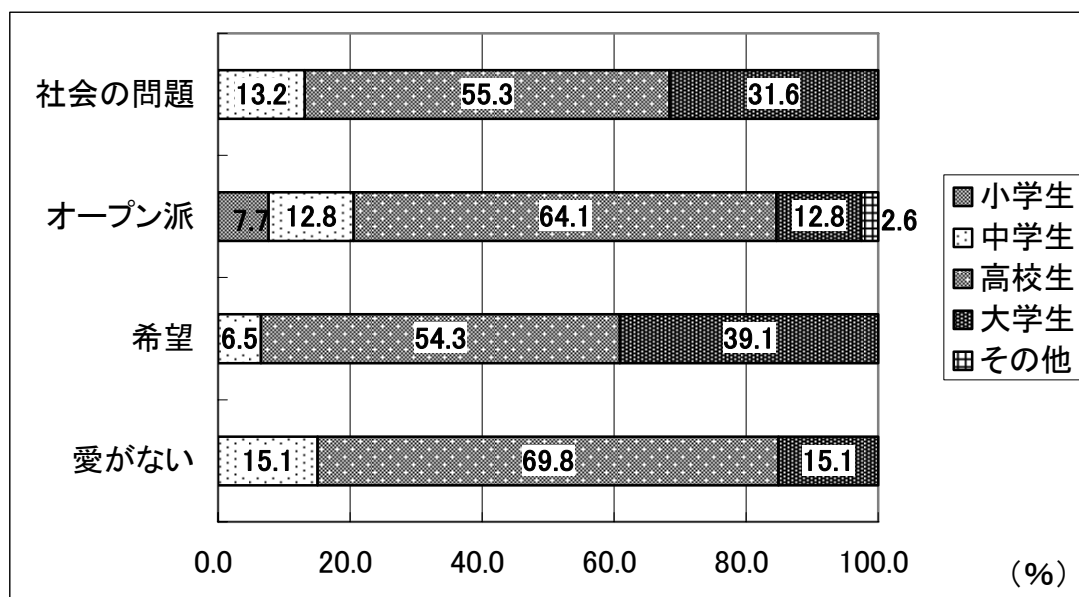
図表Ⅱ－３３ 男性用コンドームの使用目的

図表Ⅱ－３４は、因子別に「STDの知識が欠けている」と回答した人の「男性用コンドーム」の使用目的を棒グラフで表したものである。「愛がない」因子と「オープン派」因子は避妊の為だけにコンドームを使用している人が多いことがわかった。「希望」因子の人は避妊とSTD予防のためが多く、「社会の問題」因子は変わらない結果となった。



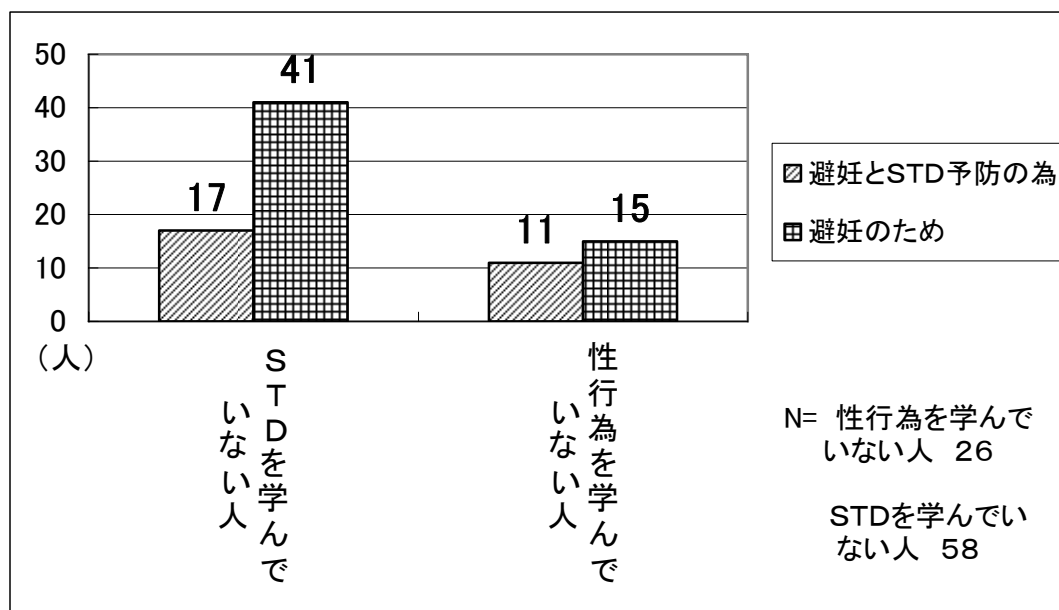
図表Ⅱ－３５ 因子別男性用コンドームの使用目的

図表Ⅱ－３６は、因子別「学校教育のどの段階で性行為を学んだか」を棒グラフに表したものである。「オープン派」因子には、「小学生」で学んだ人がいるのに対し、他の因子は０人となっている。自分が「小学生」で学んだことによって、性に関してオープンの方が良いと感じたのではないだろうか。その他は差がないことが明らかになった。



図表Ⅱ－３６ 因子別学校教育のどの段階で性行為を学んだか

図表Ⅱ－３７は、学校教育段階で「STD・性行為を学んでいない人」の「男性用コンドーム」の使用目的をクロス集計し、棒グラフに表したものである。どちらも避妊のためが多いことがわかる。特に「STDを学んでいない人」は圧倒的に避妊のため人が多いことが明らかになった。

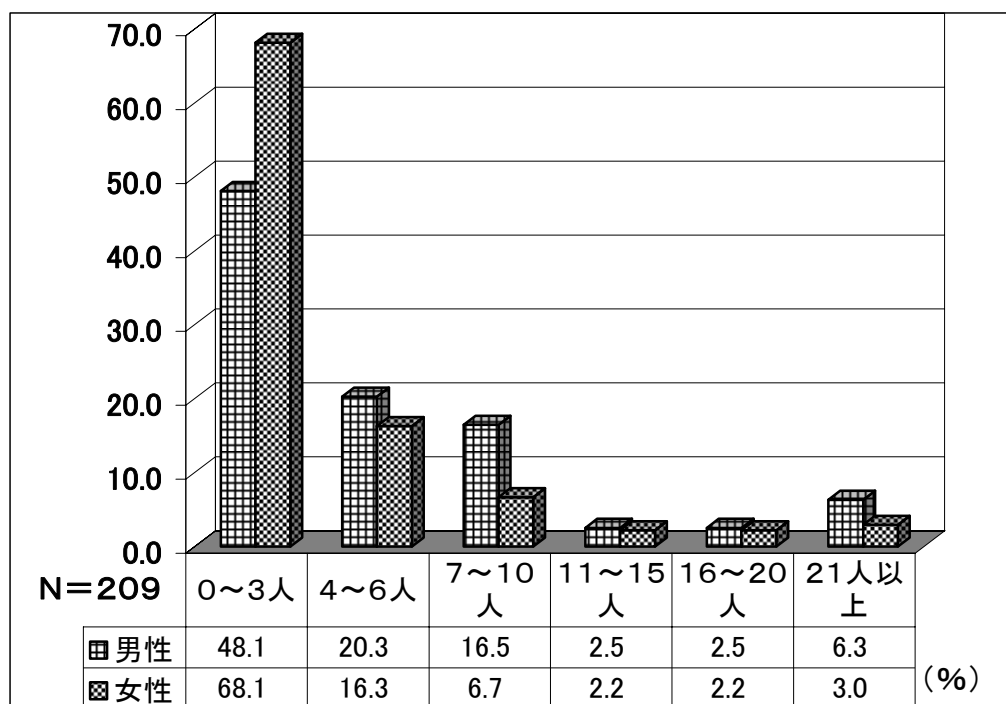


図表Ⅱ－３７ STD・性行為を学んでいない人のコンドームの使用目的

4 若者の現状

(1) 貴方は、おおよそ何人くらいの人と性行為をしましたか

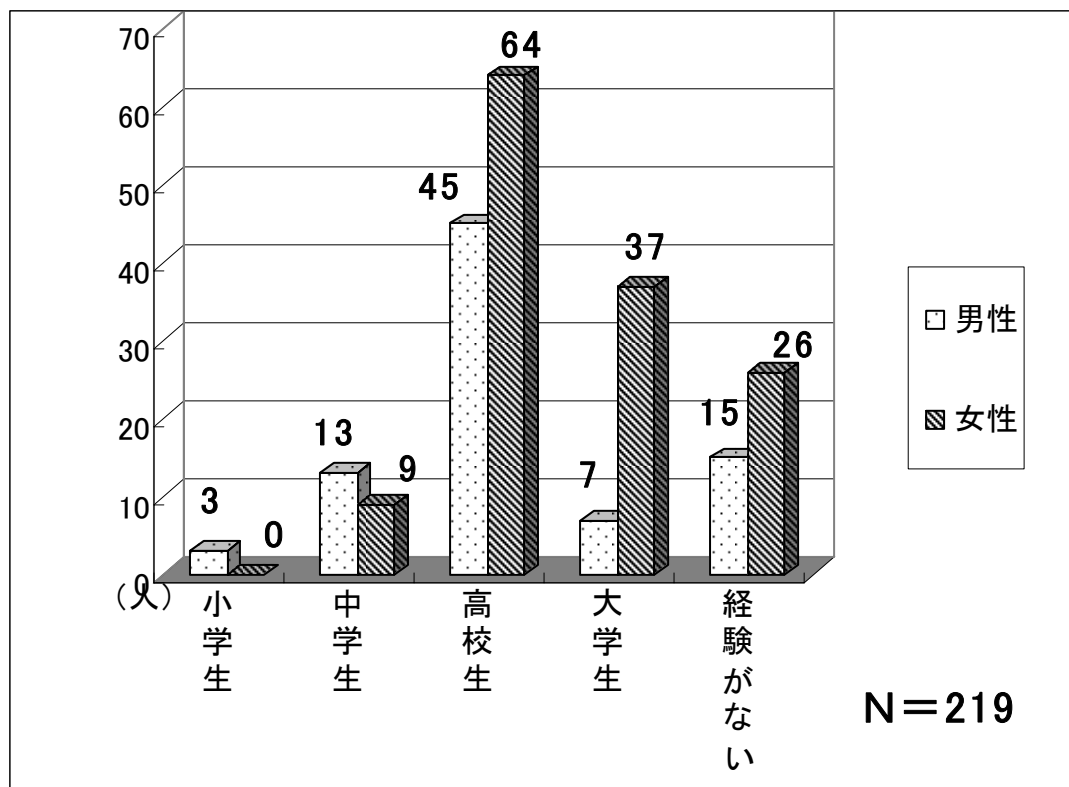
図表Ⅱ－３７はおおよそ何人くらいの人と性行為をしたかを棒グラフに表したものである。男女共に「0～3人」が一番多く、男性「48.1%」、女性「68.1%」という結果となった。男性で「21人以上」性行為をした人が「6.3%」と予想以上であった。男性は「0～10人」間に多く、女性は「0～6人」間が多いことがわかった。その結果、女性より男性のほうが性行為をした人数が全体的に多いことが明らかになった。



図表Ⅱ－３７ おおよそ何人くらいの人と性行為をしましたか

(２) 初体験はいつですか

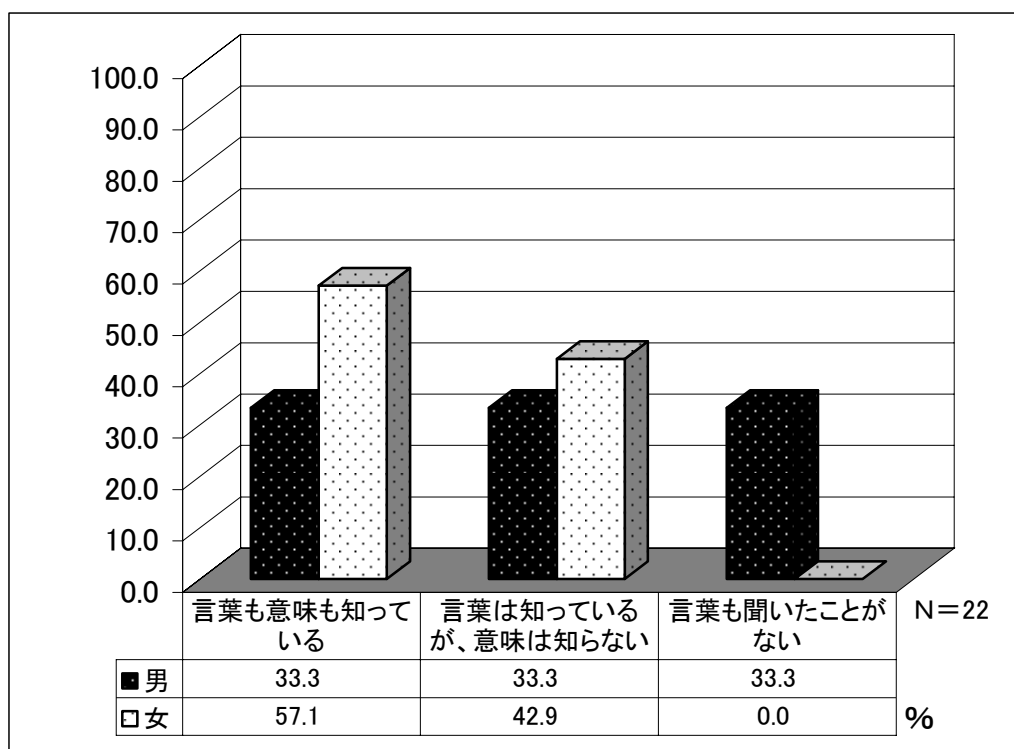
図表Ⅱ－３８は、男女別で初体験はいつかのグラフである。男女共に、「高校生」が圧倒的に多く女性はいちばん多く、男性は次である。これは、性に対して興味を持ち始める時期が「高校生」なのではないだろうか。「小学生」で経験した人は女性が０人だったのに対し、男性は３人いた。男性の初体験順位は、「高校生」「中学生」「大学生」だった。女性は、「高校生」「大学生」「中学生」という結果となった。女性に比べ男性は初体験が早いことが明らかになった。



図表Ⅱ－３８ 初体験

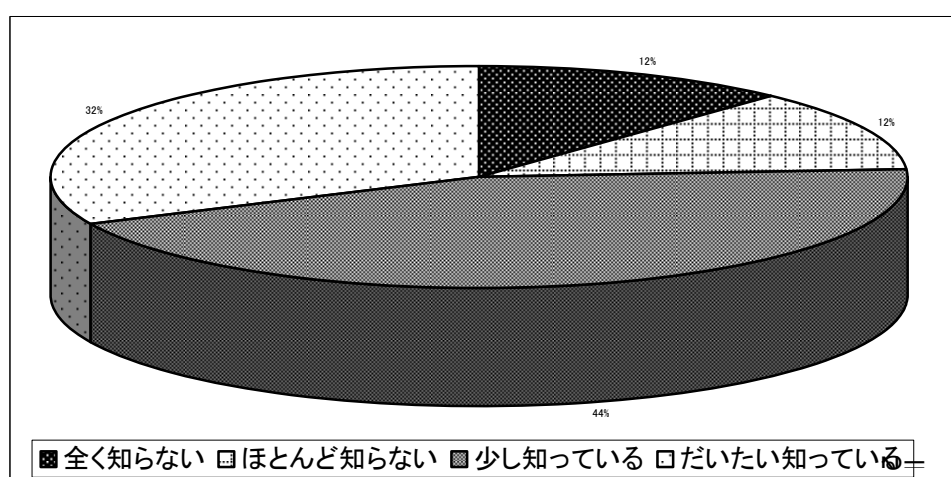
(3) 初体験が小学生・中学生の人の知識

図表Ⅱ－３９は、初体験が「小学生」「中学生」の人が「STDという言葉を知っているか」を表しているグラフである。男性は、全体的にばらつきがない。女性は、「言葉も聞いたことがない人」は誰もいないことが明らかになった。中でも、「言葉も意味も知っている人」が多いことから、STDに対し意識が高いといえる。



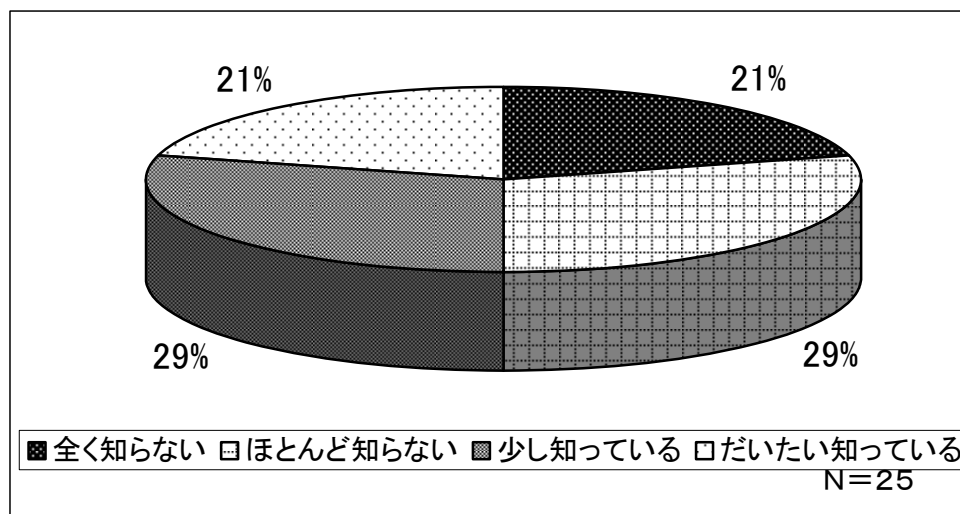
図表Ⅱ－３９ STDという言葉について知っているか

図表Ⅱ－４０は、「STDの中に自覚症状がないものもあることを知っているか」をクロス集計し、円グラフに表したものである。図表Ⅱ－４１は、「STDは不妊症や流産になることもある」ということについては、半々にわかれた。この結果から、小学校・中学校で経験をした人がSTDの知識があるわけではないことが明らかになった。



図表Ⅱ－４０

STDの中には、自覚症状がないものもあること知っていますか



図表Ⅱ－４１

STDには不妊症や流産になることもあるということを知っていますか

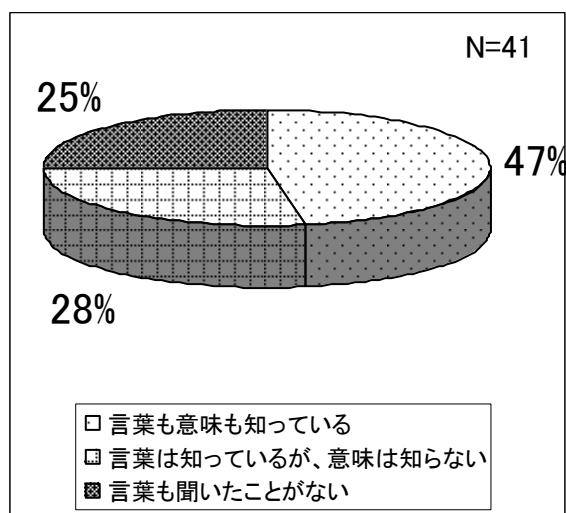
(４) 経験の有無による知識

図表Ⅱ－４２は、経験ない人のSTDの知識について円グラフに表したものである。図表Ⅱ－４３は、経験のある人のSTDの知識について円グラフに表したものである。この結果から知識は、経験の有無には関係がないことが明らかになった。

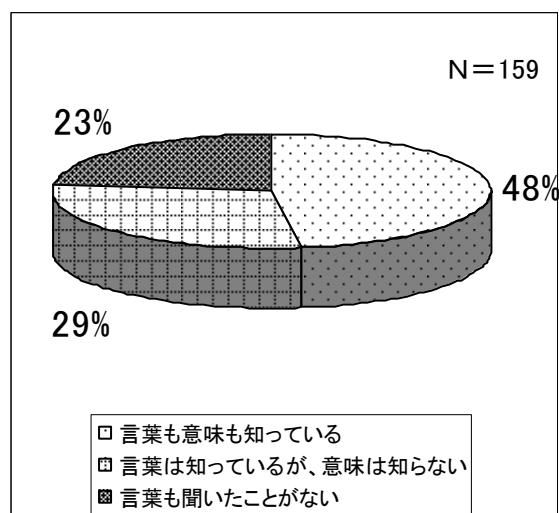
又、図表Ⅱ－４４は、経験の有無の男女の比較を横棒グラフに表したものである。男性 86 人、女性 164 人に回答してもらったが、経験の有無はSTDの知識には、全く変わらないことが明らかになった。

図表Ⅱ－４５は「初体験」の平均値を出したものである。男性、女性ともに「高校生」だった。

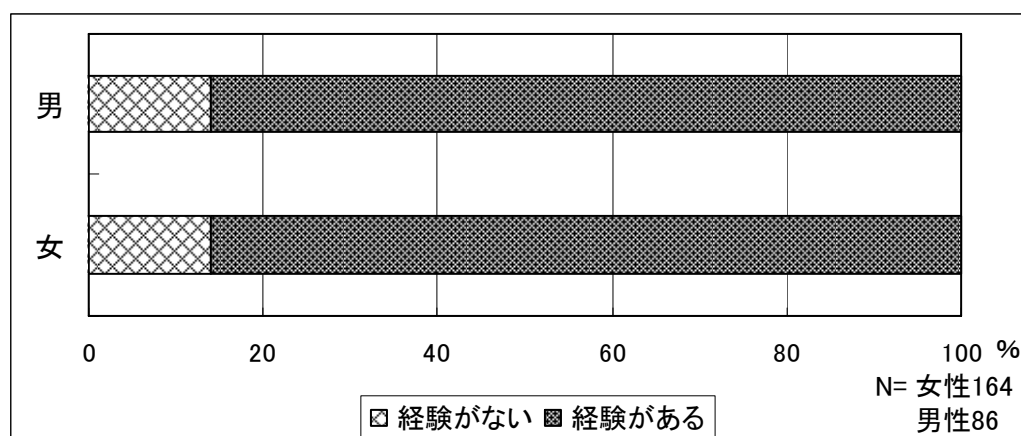
図表Ⅱ－４６は「経験のない人」の平均値を出したものである。男性 19.7 歳、女性 20.8 歳をなった。この結果から、男女の差はないことが明らかになった。



図表Ⅱ－４２ 経験がない人



図表Ⅱ－４３ 経験がある人



図表Ⅱ－４４ 経験の有無の男女比

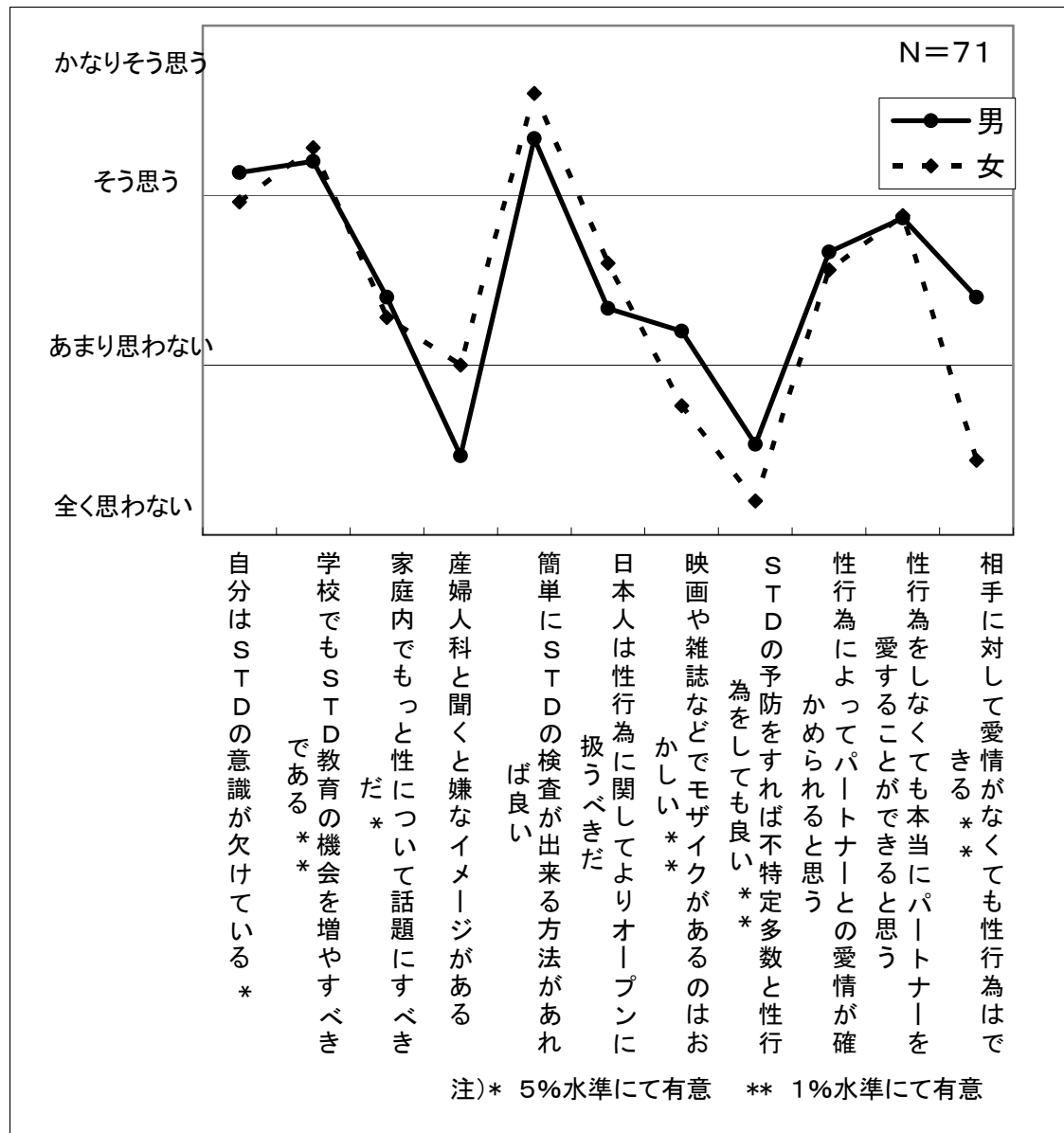
初体験の平均値	男性	*高校生*	経験がない人の平均年齢	男性	19.7 歳
	女性	*高校生*		女性	20.8 歳

図表Ⅱ－４５

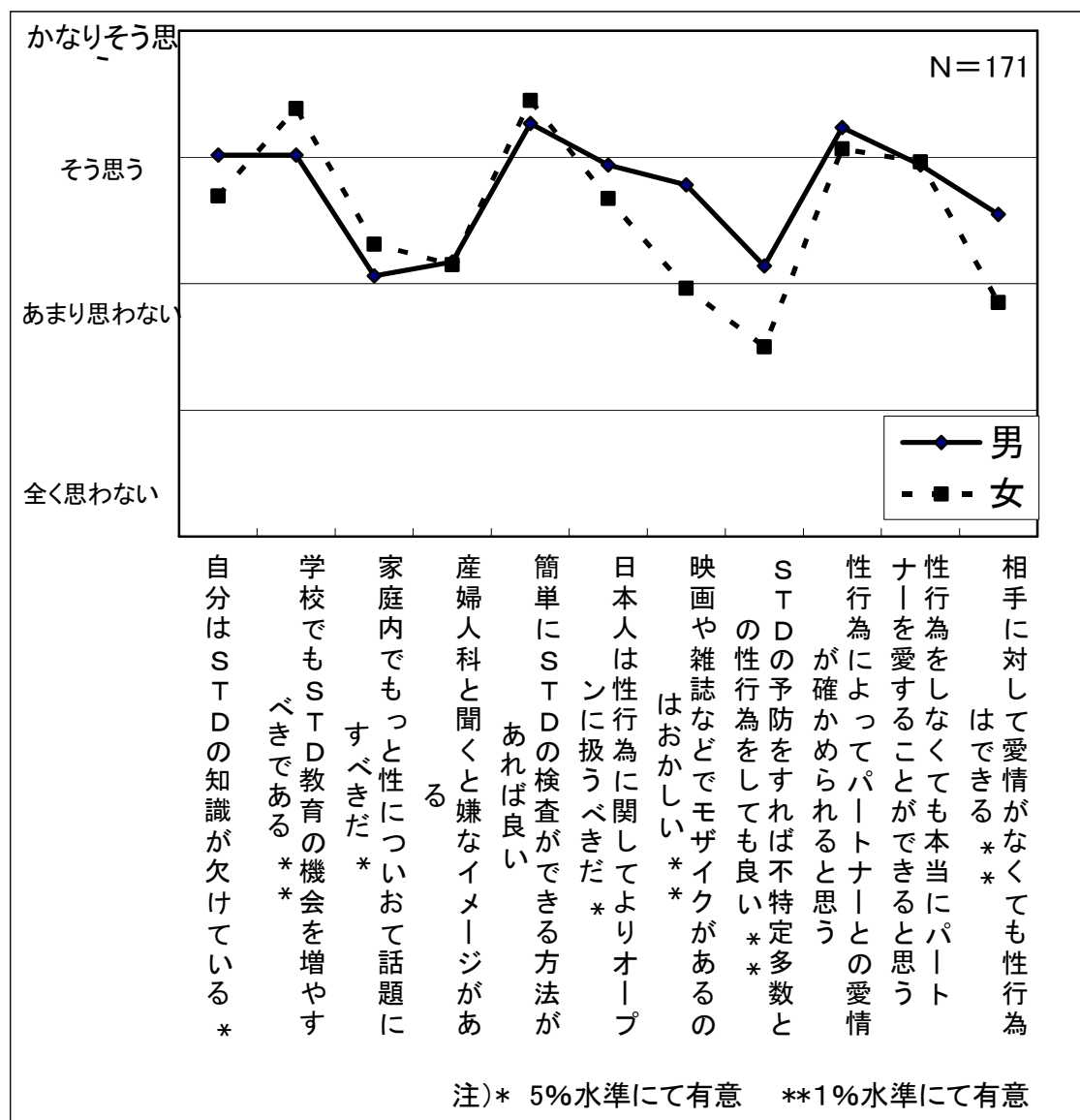
図表Ⅱ－４６

図表Ⅱ－４７は、「経験がない人」の意識を男女比で折れ線グラフに表したものである。最も男女差が大きかったのは、「相手に対して愛情がなくても性行為はできる」である。経験の有無に関わらず、男性は相手に対して愛情がなくても性行為はできると思った人がいることが明らかになった、

図表Ⅱ－４８は、「経験のある人」の意識を男女比で折れ線グラフに表したものである。最も男女差が大きかったのは、「相手に対して愛情がなくても性行為はできる」「映画や雑誌にモザイクがあるのはおかしい」「STDの予防をすれば不特定多数と性行為をしても良い」である。この結果から、女性に比べ男性の方が性に対してオープンな考えであること、そして愛と性欲は別だということが明らかになった。



図表Ⅱ－４７ 経験がない人の意識

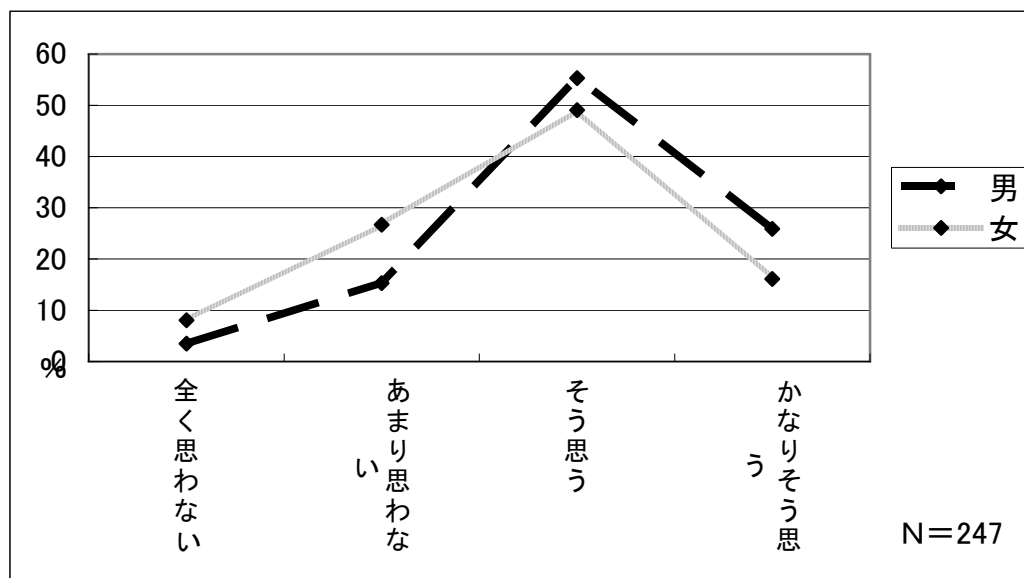


図表Ⅱ－４８ 経験がある人の意識

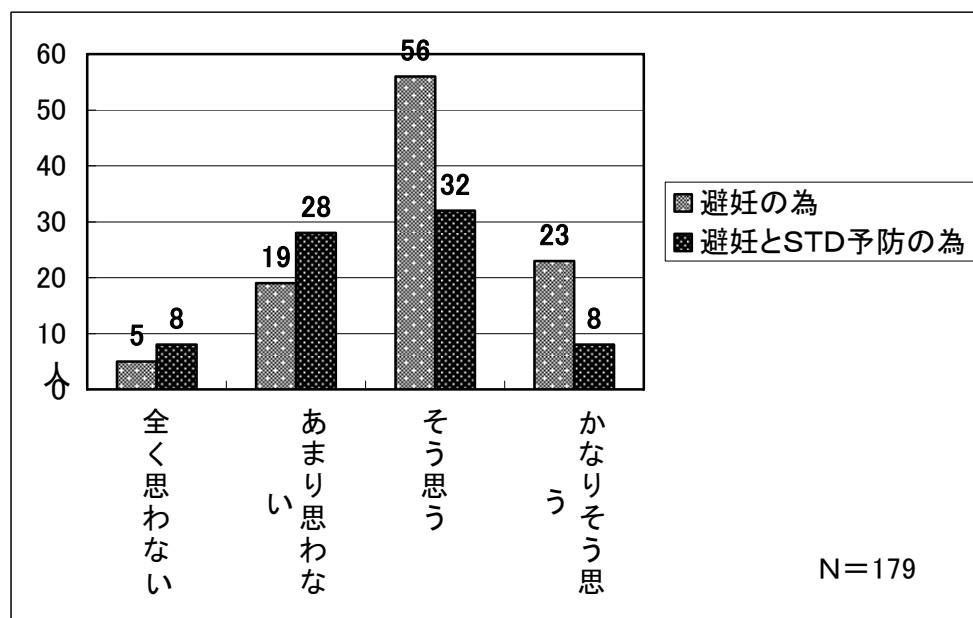
図表Ⅱ－４９は、「自分はSTDの知識が欠けている」を男女の比較で表したものである。男女共に、「そう思う」が多い。又、「全く思わない」が一番少ないことが明らかになった。

図表Ⅱ－５０は、「自分はSTDの知識が欠けている」と思った人の中で「男性用コンドーム」の使用している人の使用目的をグラフで表したものである。ここで、「STDの意識が欠けている」という項目に対し、「そう思う」と回答した人は、コンドームの使用目的が「避妊の為」という人が多いことが明らかになった。又、「全く思わない」と回答した人の「男性用コンドーム」の使用目的は、「STDと避妊の予防の目的」と

ということがわかった。「かなりそう思う」と答えた人も「男性用コンドーム」の使用目的は、「避妊の為」が多く、「あまり思わない」と回答した人の「男性用コンドーム」の使用目的は、「避妊とSTDの為」の人が多い。



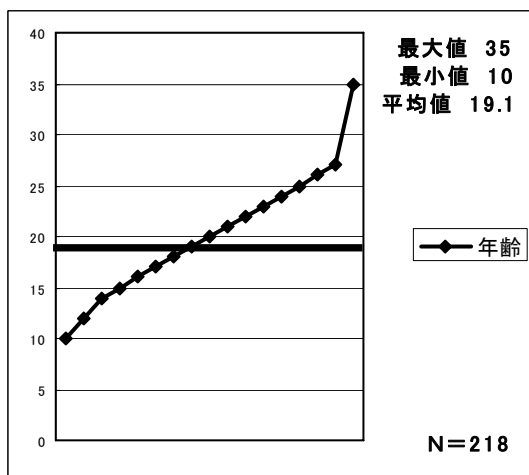
図表Ⅱ－４９ 自分はSTDの知識が欠けている（男女の比較）



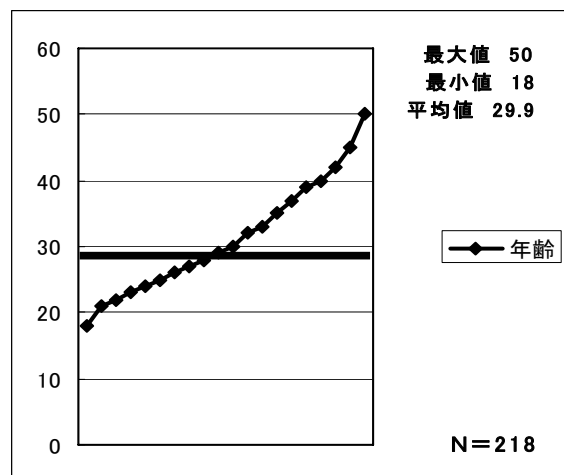
図表Ⅱ－５０ STDの知識が欠けていると思った人のコンドームの使用目的

(5) 貴方の性行為の相手（パートナー）として考えられる
年齢の範囲は何歳ですか

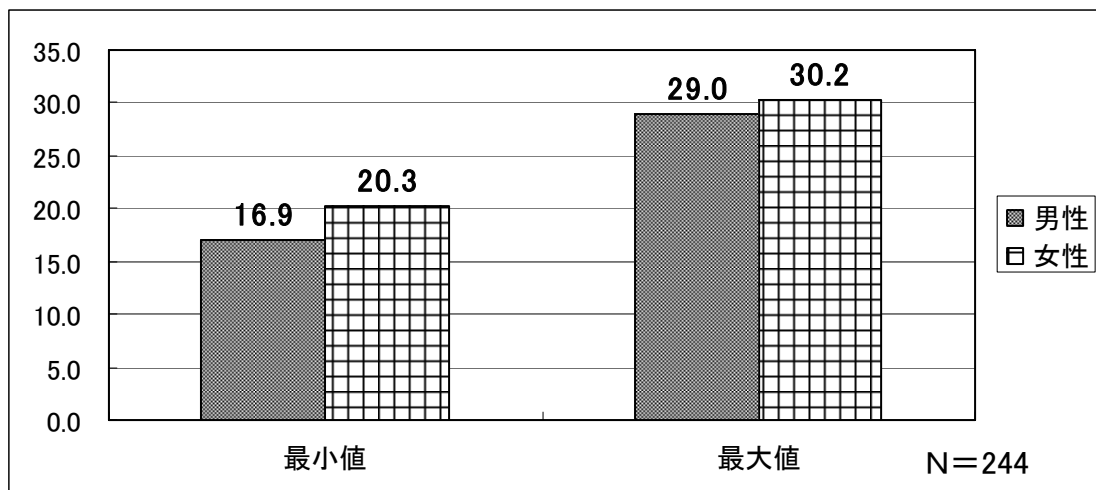
図表Ⅱ－５１は、最小値を表したものである。下は、10歳から上は、35歳と幅広くなっている。又、図表Ⅱ－５２の最大値に関しても、下は18歳上は、50歳と幅広くなっている。図表Ⅱ－５３の男女別平均値は、全体的に男性が低く女性が高いことが明らかになった。女性は年上好きであり、男性は20代までが性行為の相手として考えられていることがわかった。又、最高値では、男女別は1歳しか変わらないのに対し、最小値では4歳も離れている。この結果から、男性は若い女性が好きと明らかになった。



図表Ⅱ－５１ 最小値



図表Ⅱ－５２ 最大値



図表Ⅱ－５３ 男女別平均値

(6) 今、一番抱かれない(抱きたい) 芸能人

現在の若者の性の対象イメージがどのようになっているか調査を行った。

1～3位は以下の通りである。4位以下は、男性ではオダギリジョー、坂口憲二で、女性では、黒木瞳、中島美嘉という結果となった。

ランキングを見ると、女性は爽やか系を好んでいると言える。男性は癒し系を好んでいると言えるのではないかな。しかし、雑誌などでは上位を占めている、男性では木村拓哉、女性では浜崎あゆみなどがランキングに入っていない。実際、木村拓哉は2票、浜崎あゆみは0票という結果となった。

	男性有名人	女性有名人
1 位	福山 雅治	矢田 亜希子
2 位	吉沢 悠 玉木 宏	長谷川 京子
3 位	岡田 准一	上戸 彩

第Ⅲ章 まとめと今後の課題

1 まとめ

STDの知識では、男女共に知識が少ないことが明らかになった。又、言葉も聞いたことがないと回答した男性が多くいたことから、女性より男性の方がSTDに関心を持っていないことが言える。最も知られていたのは、「AIDS」である。続いて「クラミジア感染症」「ケジラミ」が知られていたことが明らかになった。又、男女の差が最も開いていたのは、「外陰部カンジタ症」「膣トリコモナス」である。

学校教育の段階で「性行為」について多く学ばれていたのは、「中学校」である。他の学校教育の段階では、ほとんど学ばれていないことがわかった。「STD」については、どの段階でもほとんど学ばれていないことがわかった。この結果から、「性行為」「STD」について、学校教育で多くの人が学んでいないことが言える。しかし、「STD」を大学で学んだ女性が多いことが明らかになった。学校教育以外のどこで「性行為」学んだかについては、「本・雑誌」「友人」が多かった。身近で手の届きやすいものから学んでいることが明らかになった。

「STDの中には自覚症状があまりでないものがあることを知っていますか」の質問では、「知っている」と答えた人が多かった。「STDの影響で不妊症や、流産をすることがあります。それについて貴方は知識がありますか」の質問では、女性は「知っている」と回答した人が多いのに対し、男性は「知らない」と回答した人が多かった。

「自分がSTDではないかと不安になったとき貴方はどのような行動にでると思いますか」の質問では、予想外な結果が見られた。「病院へ行く」が男女共に多かった。この結果から、自分の身が不安と感じたとき「STD」に対し、前向きに考えていることが明らかになった。

「恋人がSTDになったと知らされたら、貴方はどのような行動にでると思いますか」の質問では、「交際を続ける」と回答した人が男女共に多かった。続いて「わからない」と回答した人が多かった。

「自分はSTDの知識が欠けている」と思う人が男女ともに多いことが明らかになった。最も男女の差が開いていたのは「相手に対して愛情がなくても性行為ができる」の質問である。男性は、「そう思う」人が多かった。このことから、女性は愛と性欲は一緒に、男性はどちらかというと愛と性欲は別だと言える。

「避妊用具」では、知っているものは「IUD〔子宮内避妊用具〕」以外は、知られていた。中でも「男性用コンドーム」は圧倒的に知られていたのである。使用したことのあるものでは、「男性用コンドーム」が多かった。この結果から、「男性用コンドーム」以外は、知られていても使用していないことが明らかになった。

「初体験はいつですか」の質問では、男女共に平均が高校生である。「何人くらいの

人と性行為をしたか」の質問では、男女共に「0～3人」が多いことがわかった。

S T Dの関心については、女性の方が知識と関心が少し高いことが明らかになった。避妊用具は、知っているものが多いのに対し、使用したことがあるものが少ない。経験の有無による知識と意識は、変わらないことがわかった。

若者の初体験は、年々早まっている。知識もないまま性行為をすること。それが、病気に繋がるのではないだろうか。その他に、援助交際や売春などといった不特定多数との性行為もS T D増加の原因なのではないか。私たちは、学校でもこれからは教えていくべきだと思う。そして、知識を持って性行為をするべきだと感じた。

性感染症は「国民病」「性生活の生活環境汚染」さらに「生活の生活習慣病」と言える程までになってきている。これを防ぐためにも、自分には関係ないと思わずに、前向きに向き合っていくべきである。

2 今後の課題

現在最も恐れられている「A I D S」が、「外陰部カンジタ症」や「クラミジア感染症」のような症状のない性感染症群の中に入っている。世界中に広がり流行し、すでに感染者が全世界で4000万人に達している。世界で毎日1万6千人の新しい感染者が出ているとされ、その90数%は性感染症として蔓延しているのだ。コンドーム使用率が5%上昇するとH I V感染が20

…%は下がるという疫学研究もあることから、今やいかに一般市民にH I V/S T Dの危機感を高め、コンドーム使用の必要性を浸透させるかが、今後の課題だと思う。

今後、さらに検討してみたい点としては、以下の3点があげられる。

一つ目は、小学校、中学校、高校、大学の教師にS T D・性行為を学校で学ぶべきか。そして、教えるべきと思っているかなどを調査したい。

二つ目は、初体験が早まっていることから、小学生の知識や意識など年齢層を広げ調査を行いたい。

三つ目は、今回プライベートのことで調べるができなかったので、病院の先生に協力してもらい、実際S T Dにかかった患者数や、患者の知識、意識を調べたい。

私たちは、このアンケートをしたことによって一人でも多くの人が、S T Dに関心をもち、S T Dは怖いということを理解してもらいたい。そして性生活がある人は検査をしようと思ってくれることを望んでいる。

そして、もう少しS T Dに対する偏見をなくしたいと思う。そういった偏見があるからこそ、恥ずかしいという気持ちになり、S T D自体に背をむけてしまうのではないだろうか。放っておかず、S T Dと向き合っていくべきではないか。

